応用心理学のクロスロード

特集 日本応用心理学会第90回大会報告

CROSSROAD ESSAY 私と応用心理学

17

2025 July

JAAP 日本応用心理学会

人間のお風呂、人間の薬

田中 真介
（日本応用心理学会、第８期理事長）

わが国は、第２次世界大戦後間もない1948年に予防接種法を制定した。しかしその法律のもとで強制接種を開始したジフテリア予防接種によって、１～２歳児を中心に、京都で68名、島根で16名の死亡者を出した。重症者は総計1000名以上に及ぶ世界最大の予防接種事件だった。だが原因は大阪日赤医薬学研究所でのワクチン製造過程での無毒化のミスとされ、国や厚生省の責任は問題とされなかった。

2005年にこのジフテリア・ワクチンの検査システムに重大な不備があったことが判明した。また法務庁が厚生省に、事件発生後にわずかな慰謝料で被害者の訴訟提起を放棄させるよう指示した内部文書が発見された。しかし当時、この事件を闇に葬ることに成功してしまった厚生省は、その後、コロナワクチンを含めたあらゆるワクチンで予防接種被害を多発させて現在に至っている。

とくに1970年代には、天然痘の予防ワクチンである種痘の強制接種による被害が顕在化し、大きな社会問題となって全国訴訟が提起された。種痘の接種で被害を受けた145家族は、1973年以後、国に補償を求めて集団訴訟を行って全面勝訴した。国の過失責任が認められたことで、1994年には予防接種法が大幅に改正され、すべての予防接種が義務接種から勧奨接種に改められた。

京都大学の田中昌人と滋賀大学の田中杉恵は、全国訴訟のうち、関西での予防接種被害訴訟での原告側証人として立ち、被害を受けた子どもたちやその家族を支える役割を担っていた。田中らは、種痘ワクチン接種で重い副作用被害を受けた原告22名全員の健康と発達の状況について実態調査と発達診断を実施し、予防接種の副作用で受けた発達上の障害が、通常の知的発達遅滞と質的に異なることを立証した。また、被害児童らの家族の生活実態をとらえるために、一昼夜ビデオ映像記録を撮って「24時間タイムスタディ」を行い、被害を受けた家族が、その療育生活の中でどのような困難があるかをビデオ解析で明らかにしていた。

大阪高等裁判所での関西訴訟の裁判の中で、1992年秋と1993年の冬に原告側証人質問が行われ、筆者は田中夫妻とともに京都から大阪へ向かった。大阪高裁に赴く前に、筆者はワクチン被害の歴史的な経過と現状について二人から説明を受け、被害の実態と療育生活の厳しさを知ることとなる。

田中昌人は大阪高裁での当日の証言の中で、ワクチンによって被害を受け重い疾患や障害を受けた人たちの療育のあり方について、「人間のお風呂」そして「人間の薬」が大事だとして、証人質問に答えて次のように述べた。裁判の速記録から要約する。

「家の中で一人でできていることも、それをさらに家の外でその力が発揮できれば、さらによりよく生きることができますね。しかし、予防接種被害を受けた方たちには特にそこに援助が必要です。絶えず親しい人がついていくか、あるいはその人とつながりのある人が受け止めていて、よく人間のお風呂というんですけど、それがあって初めて、力が発揮できる。そういうことでの配慮が必要ですね。温かな、受容される人間関係によって支えられなければいけない。そのような介護を充実させるとともに、国が法制度を整えて被害者とその家族を支え、生涯にわたって必要かつ適切で心のこもった公的な救済をしていくことが大切です」

「家庭の中だけでの療育では、発達的な貧しさが引き起こされがちです。力の発揮の場が１つだけであると、その人が持っている力を表せる場面が少ない。…決まりきったところで自分の持って

いる力を表すしかなくて、自分の力がほんとうに太っていく、普遍性をもっていくという条件がなくなっている。同じ寝たきりであっても、学校に行く、通所の授産施設に行く、といったことが可能となることによって、その一つの力が普遍性を持つ、普遍性への両足を持つことになります。具体的には、他の人が働きかけても、表情が出てきたりします。…家庭と違って、嫌だったら泣くでしょうし、お風呂へ入れてもらうときにも、親が入れるのとは違う入れ方によるいろんな受け止めができますね。あやしてもらったり、そのことによって、親御さんのほうも新たに新鮮な関係を作って、自分に、本人に携わるというふうに、両方が新鮮な関係を持って新しいつながりが作れるということですね。…ご両親や家族の方々というのは、かけがえのない人間の薬としての役割を果たされていると思います」（応用心理学研究、38巻1号、pp.23-24）

どんなに重い疾患や障害を担っていても、温かい「人間のお風呂」そして「人間の薬」が子どもたちをそしてその家族を支える。温かな受容される人間関係、かけがえのない両親や家族の存在、そしてさらにそれを社会の中で普遍的なものとしていくことによって、互いに互いを支え合う新しい社会を生み育てることができる。このような取り組み、こうした人間のあり方こそ、青年期・成人期の人たちの生き方を支え励ますために、応心がずっと挑戦し自らの中に培ってきた伝統の精神として、ひとつの貴重なものなのではないかと感じている。

田中　真介（たなか・しんすけ）／ 発達論、神経科学、発達診断学、障害療育学を専攻。京都大学教養部、総合人間学部等を経て2013年より国際高等教育院。乳幼児期から児童期・青年期・中高齢期の発達と教育・療育の研究とともに、ワクチン接種による医療被害、メチル水銀系農薬による健康被害の研究に携わっている。著書・作品に「雨の日の動物園」「モロッコの猫をんな」「トランジット・ゾーン」（京都大学新聞）、「Slow Walkers」（季刊発達、ミネルヴァ書房）、「重度心身障害児の発達と療育」（京都大学総合人間学部）、「乳幼児期・児童期臨床心理学」（応用心理学の現在、北樹出版）、「発達がわかれば子どもが見える」（ぎょうせい）、「生きることの意味」「医療被害」（応用心理学事典、丸善）、「発達の基礎を学ぶ　～発達の見方・考え方、自我～」（みんなのねがい連載、全障研出版部）、「新型コロナワクチン　～知っておきたい副作用と救済制度のこと～」（コンシューマネット・ジャパン）などがある。

CONTENTS

[巻頭言] 人間のお風呂、人間の薬 ……田中　真介（京都大学国際高等教育院）…… 1
[CONTENTS] …… 3
[CROSSROAD ESSAY] ……林　潔（白梅学園短期大学）…… 4
[特集] 日本応用心理学会第90回大会報告 …… 6
大会委員長からの報告 ……谷口　淳一（帝塚山大学）…… 7
大会スタッフからの報告① ……森泉　慎吾（帝塚山大学）…… 10
大会スタッフからの報告② ……富田　瑛智（帝塚山大学）…… 10
次回大会委員長の挨拶 ……桐生　正幸（東洋大学）…… 12
自主企画ワークショップ報告① ……大谷　亮（（一財）日本自動車研究所）…… 13
自主企画ワークショップ報告② ……岩﨑　和子（京都工芸繊維大学）…… 14
自主企画ワークショップ報告③ ……田中　真介（京都大学国際高等教育院）…… 16
[ホープ登場 クロスロードの星] ……18
若手会員研究奨励賞 ……権野　めぐみ（名古屋葵大学）…… 18
若手会員研究奨励賞 ……巻田　晴香（同志社大学大学院）…… 19
[職場探訪] ……20
筑波大学付属視覚特別支援学校 ……塚田　直也 …… 20
[アワード] ……22
齊藤勇記念出版賞受賞『職場で使えるジェンダー・ハラスメント対策ブック
―アンコンシャス・バイアスに斬り込む戦略的研修プログラム―』
小林　敦子 …… 22
[書評 Book Review　本を出しました] ……ハル・モリシタ（帝塚山大学）……23
常任理事会通信 ……24
理事長メッセージ……田中　真介 …… 24
第90回大会委員会……谷口　淳一 …… 25
事務局だより ……軽部　幸浩 …… 26
機関誌編集委員会……軽部　幸浩 …… 27
企画委員会 ……桐生　正幸 …… 27
学会活性・研究者支援委員会 ……上瀬　由美子 …… 28
国際交流委員会……松本　友一郎 …… 29
学会賞選考委員会……伊坂　裕子 …… 30
齊藤勇記念出版賞選考委員会 ……軽部　幸浩 …… 31
応用心理士認定審査委員会 ……小林　剛史 …… 31
ホームページ委員会 ……軽部　幸浩 …… 32
クロスロード委員会 ……来田　宣幸 …… 32
倫理委員会 ……来田　宣幸 …… 33
学会史編纂委員会……田中　真介 …… 34
心理学検定 ……小林　剛史 …… 34
原稿募集 …… 35
学会だより ……36
2024年度日本応用心理学会学会賞 …… 36
入会申込書 …… 37
「応用心理士」資格認定申請のご案内 …… 38
編集後記 ……39

林　潔
（白梅学園短期大学）

カウンセリングと国際交流

国際交流で在外研究員だった駒澤大学の中村昭之先生と、アーミデールのオーストラリア心理学会に出席したことがあります。「こちらの人は、禅と瞑想の話をすると関心を持ってくれるんですよ」とおっしゃっていました。

異文化にもとづく人間理解とアプローチ、関心が寄せられるところです。

行動療法の内山喜久雄先生は、不安のTrophotropic shiftの発展のためには、東洋における古来の方法にも目を向ける必要があろう。禅、ヨガ、TM法（注１）のほか、解脱、安心立命、涅槃、菩提の道としての念仏、称名、写経、さらには能、詩歌、管弦その他、わが国古来の生活、習俗の中にも新たな発見があるかもしれないからであると、述べておられます。これらの中で、何が世界に発信されているでしょうか。

禅と瞑想の影響は、特にカバットジンの影響で、現在カウンセリング、心理療法の分野でマインドフルネスとして知られております。

カウンセリング、心理療法（注２）、あるいは臨床心理、心理臨床と呼ばれている分野は、さまざまな周辺領域の知識も受けて、その関わりのもとで発展してきました（注３）。

カウンセリング、心理療法の分野で欧米の活動やモデル、その周辺については知られております。しかし、そのほかの地域の活動についてはどうでしょう。

中村昭之先生門下の高橋良博、浩子先生とのご縁で、北京大学の李同归先生たち、およびわが国の先生たちのご参加を得て、ワークショップをさせて頂き５回になりました。

第５報告では、行動と心理衛生北京市重点実験室のご所属でもある李同归先生と、内モンゴル自治区中蒙医学研究院の納貢先生、中国人民大学の呉先生は、蒙医の心身相互作用療法：癌患者の治療に果たす役割と題する発表をされました。

蒙医の心身作用療法は、モンゴル医学の心身統一の全体感を指導原則として、現代心理学と伝統的な健康維持の理論を基礎にし、物語を特徴として、光、電気、音、映像などの現代的な科学的技術を用いて、集団相互作用を形成する新しい医療モデルです。身体的症状、心理的な感情、生活の質、治療効果について検討するために1590の有効データを得て、癌患者がこの療法を受けることによって94.8%の満足を示しているという報告をされていました（日本カウンセリング学会第56回大会　2024）。過去の中国の発表では、医学の祖、黄帝を源流とした発想が反映されていました。

西安（かつての長安）での研修会の雰囲気を思い浮かべます。

戦後のカウンセリングの導入と発展に大きな足跡を残された、本学会名誉会員でもいらした中村弘道先生は、以下の文を残されています。

今日のカウンセリング・プログラムはあらゆる人々の数多くの要求に対してサービスする必要があると考えられる。このような計画は、不適応なもの、正常なもの、優秀なものに対してなさるべきであり、そこには心理療法、技能矯正、進路指導、職業選択、学習習慣、態度変容などのあらゆる種類の援助が行わなければならない。カウンセリングが十分に効果をあげるためには、このようないろいろな目的のために、いろいろな型の人をカウンセリングすることが必要であると思われる。

言語交渉の役割については言うまでもありません。しかしわれわれは、「とても言葉にならない」という出来事も経験したばかりです。

人を支え、癒やし、また成長を促す契機としての営み。

わが国や中国（注４）に限らず、それぞれの国のしかるべき立場の人々の実践事例が、多く交換される機会が、国際学会だけではなくいろいろな形で進められないでしょうか。インドでは、ロシアでは、中東では？など。

中国といえば、中学１年生の漢文で、最初に出

会った詩を思い出します。

洛陽城東桃李花
飛来飛去落誰家（略）
年年歳歳花相似
歳歳年年人不同

注 *1　超越瞑想法
*2　カウンセリングの源流は相談です。このような日常的なことについては資料もないでしょう。あえて捜すと、史記五帝本紀第一に、帝堯は四嶽（いわば地方長官）に施政の相談をしたとあります。また日本書紀巻十一に応仁天皇崩御の際に太子は後の仁徳天皇に後継帝位について相談をしたと記述されています。これに対して治すという意味を持つ心理療法の源流は、原始神秘主義あるいは宗教の営みにさかのぼります。
*3　この４つの用語についての概念規定には、それぞれの方の考え方や立場があるでしょう。
*4　わが国と中国とのカウンセリングの交流は、筑波大学の松原達哉先生と、清華大学のファン・フミン先生によって始まりました。

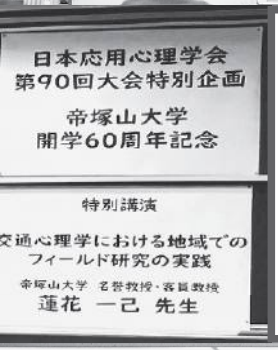
引用文献

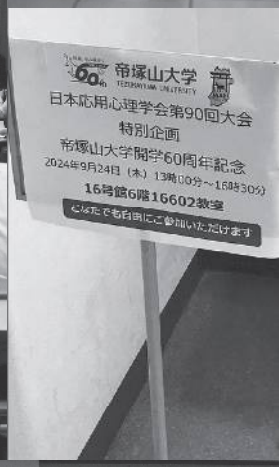
中村弘道　1968　アメリカにおけるカウンセリングの動向　相談学研究，1，1-5.(*現在、カウンセリング研究)

内山喜久雄　1984　不安･ストレスの行動療法：Trophotropic shiftへの行動論的アプローチ　行動療法研究，9, 70-77.

林 潔（はやし・きよし）／ 立教大学大学院応用心理学専攻修了
Australian and NZ Student Services Assn, Hon Life Member
中国陝西省心理諮詢師協会名誉顧問

日本応用心理学会
第90回　大　会
帝　塚　山　大　学





日本応用心理学会第90回大会を終えて

日本応用心理学会第90回大会委員会委員長：谷口 淳一
（帝塚山大学）

日本応用心理学会第90回大会は、2024年８月27日（火）、28日（水）の２日間、奈良の帝塚山大学学園前キャンパスで開催し、無事に終了することができました。……とご報告したかったのですが、皆さまご存じの通り、台風10号の接近によって対面開催は中止となり、後日、オンラインで対応を行いました。

そんな無事に終わらなかった第90回大会ですが、2022年の常任理事会後に当時の古屋理事長より開催の打診をいただきました。その後、2007年に帝塚山大学で開催した第74回大会を盛会に導いた森下高治先生、蓮花一己先生にすぐに相談し、後押ししていただいたことで受諾することとしました。当時とは状況が異なり、盛大には開催できそうになかったですが、工夫して実施しようと考えました。

すぐに大会委員会を結成しました。大会委員長を谷口が務め、事務局長を森泉慎吾先生にお願いし、ご快諾いただきました。森泉先生は2018年に大阪大学にて開催された第85回大会の運営において中心的役割を担っており、その経験が頼りでした。実際、大変助かりました。また、翌2023年には富田先生が帝塚山大学に着任され、それと同時に副事務局長に就任していただきました。さらに、蓮花先生と森下先生には大所高所からサポートをいただこうと顧問に就いていただくよう依頼し、ご快諾いただきました。

2022年の京都工芸繊維大学での第88回大会、2023年の亜細亜大学での第89回大会の総会にて、それぞれ挨拶をさせていただき、奈良に来ていただくように会員の皆様にお願いしました。COVID-19が蔓延していた時期は観光地である奈良は閑散としていましたが、COVID-19の５類移行後は外国からの観光客も増加し、2024年時点ではかなりの賑わいになっておりました。

2023年の亜細亜大学の大会後から本格的な準備に入り、頻回に委員会を開催し、準備を進めました。本大会では明確な大会テーマは掲げなかったのですが、せっかく皆さんに奈良に来ていただくということから「奈良」という地域性を重視することとしました。また、大会を実施する2024年は帝塚山大学開学60周年を迎える年であり、本大会も60周年記念事業の１つに位置づけ、大学からも後援していただくことになりました。

そのうえで３つの大会企画を実施することとしました。

１つ目は、蓮花先生に特別講演をお願いしました。蓮花先生は詳細な説明は不要だと思いますが、交通心理学および応用心理学の分野を長年にわたってリードされてきました。これまでの先生の研究の中心の１つが、交通場面というフィールド研究です。奈良というフィールドを対象とした研究も数多くあり、それらを紹介していただくことをお願いしました。さらに、本大会は90回記念大会でもあることから、若手研究者へのメッセージもいただきたいという要望まで追加しました。その要望に応えていただき、「交通心理学における地域でのフィールド研究の実践」というタイトルで素晴らしい特別講演をご準備いただきました（９月24日の代替イベントで講演いただきました）。

２つ目は、本学の中地展生先生にお願いし、「大学と地域の協働―帝塚山大学におけるグループ・アプローチ実践―」と題したシンポジウムを実施することとなりました。帝塚山大学心理学部では、これまでに地域支援のためのさまざまなグルー

プ・アプローチやプロジェクトを実施してきました。それらプロジェクトを中地先生、小西浩嗣先生、山口祐子先生からご紹介いただくとともに、現在実施している奈良県下の小学校で心理教育を行うプロジェクトに関わっている現役の大学生に話題提供をしていただくこととなりました。また、中地先生、山口先生の恩師でもある九州大学名誉教授である野島一彦先生にご登壇いただくことになり、「地域支援とグループ・アプローチ」をテーマにご講演いただき、先の話題提供に対して指定討論をいただけることになりました（10月22日の代替イベントで実施しました）。

３つ目は、特別セミナーとして「奈良酒を知る/伝える―酒販店経営者と研究者の対話―」を実施することとしました。奈良は清酒発祥の地とも言われ、数多くの歴史文化資源を備えるとともに、近年は個性豊かな地酒ブランドが数多く台頭し、注目を集めています。本学文学部の河口充勇先生は、日本酒、とりわけ奈良の酒販店の研究を長年されており、ぜひお話をして欲しいとお願いし、ご快諾いただきました。加えて、大会当日の懇親会で奈良の地酒をたくさん並べたいと考えており、河口先生が懇意にしている登酒店（天理市）にお願いにうかがいました。その際に、セミナーでもご登壇いただく旨をお願いし、ご快諾いただきました。奈良の地酒についてのお話を聴講してから、実際に懇親会でその地酒を飲んでいただくという素晴らしい企画となりました（９月24日の代替イベントで実施しました）。

本学で以前に実施された2007年の第74回大会の懇親会は奈良ホテルで盛大に行われたのですが、さすがに予算的にも難しいため、懇親会は学内で行うことにしました。ただし、上記の奈良の地酒に加えて、料理にはこだわろうとして、大学の事務職員の方がアルペンローゼという素晴らしいお店と交渉してくださり、ケータリングをしてもらうことになりました。また懇親会より前に決めたのが、大会前日に行われる理事会の場所です。こちらはせっかくなので近鉄奈良駅からすぐの猿沢池の畔のホテル尾花で実施することとして、理事懇親会もこちらで開催する予約を早々にしました。総会のお弁当にもこだわろうと、普段から個人的にお気に入りのシブレットというお店から配達してもらうこととしました。

2024年４月には奈良ビジターズビューローにうかがい、さまざまなご支援をいただけることになりました。2024年６月には、本大会と同じキャンパスで日本老年社会科学会第66回大会を本学の奥村由美子学長が大会委員長を務めて盛大に開催されました。われわれもスタッフとして関わらせていただき、大会当日の恰好の予行演習となりました。

このころ、学生スタッフの募集も始めました。私や森泉先生、富田先生のゼミ生にはゼミ募集の段階から学会スタッフの仕事があることを伝えており、大学院生も加えて十分な数の学生スタッフを集めることができました。さらに学部内の他の先生方に各ゼミで教育発表に申し込んでもらうようにお願いし、実際にたくさんの発表が集まりました。

さて肝心の予約参加数および発表数ですが、予想を上回る数の申し込みをいただきました。例年よりも締め切りを遅くしたことが功を奏した気もしますし、友人たちが「せっかくだから奈良に行くよ」と申し込んでくれたのも後押しになったようです。結局、参加者数211名（うち院生38名、学部生８名、非会員44名）、教育発表参加者72名、ポスター発表122件（うち教育発表28件）、自主企画ワークショップ３件、研修会２件となりました。

また大会顧問の森下先生と蓮花先生が、関係各所にお声かけいただき（いくつかは実際に東京までお願いに行かれて）、たくさんの企業より協賛をいただくことができました。

以上のように長い時間をかけ、準備万端であとは当日を迎えるだけという状態になりました。ただ、なんとなく嫌な予感がしていました。それは台風や地震など予期せぬ自然災害によって大会が中止になってしまうことです。そこで、大会前の８月10日にオンライン開催された常任理事会にて、不測の事態の対応についての指針を常任理事会から出していただくようにお願いし、了解いただき

ました。実際に８月18日付で発出していただきました。とはいってもこの時はそのようなことが生じる可能性はほぼないだろうと思っていました。あくまで念のためでした。

ところが大会開催の約１週間前の８月21日（水）、気象サイトで台風10号が発生しそうなことを知りました。しかも予報では大会当日に関西を直撃しそうでした。それからは進路が変わることを期待しながら、数分ごとに気象サイトをチェックする日々でした。

８月22日（木）、23日（金）は別の学会に参加するために東京に行っていたのですが、23日の夜に臨時常任理事会が開催されることになり、急いで奈良に戻ってきました。この時点では、まだ台風の進路がそれることに対する淡い期待もあり、またこれまでの準備が水の泡になること、奈良に来る準備をされている参加者の皆さんにご迷惑をかけてしまうことなどから、なんとか開催できないかということばかり考えていました。ただ、臨時常任理事会で、台風が直撃した場合に参加者の方を危険に晒すこと、また仮に学会に参加できても、台風の影響で帰れなくなってしまうことが予想されることなどのご意見をいただき、考えをあらため、対面開催は中止とすることを決定しました。大会委員会では決められなかったことでしたので、常任理事会で意思決定をしていただいたことは大変心強く、ありがたかったです。参加登録していただいた先生方には申し訳ない気持ちでいっぱいでしたが、「英断でした」というご意見をたくさんいただき、救われました。その後、台風はスピードが遅くなり、大会当日の奈良は晴天だったのですが、大会に参加していただいた方が無事に帰ることは難しかったと思い、やはり中止にしてよかったと思います。

中止決定後は、懇親会やお弁当などのキャンセルの連絡に追われました。そのほとんどでキャンセル料をなしにしていただくことができ、それも早目に中止を決定できたからだと思っています。私自身はキャンセル対応と並行しながら、その週の土日（８/31、９/１）に東京で開催予定だった日本社会心理学会の台風10号対応に追われました。こちらは常任理事として事務局長を担当しており、まさに中止するか実施するかの意思決定に携わらなければなりませんでした。結果、こちらも対面開催は中止となり、オンライン移行となりました。ただ、常任理事としてオンライン大会実施をサポートしようと現地に向かおうとしたのですが、新幹線が止まってしまい京都駅から動けなくなってしまいました。そのため、北陸ルートで東京に向かうこととし、金沢に１泊して何とか翌日にたどりつきました。台風10号にふりまわされた夏でした。

本大会のその後のオンライン対応については、次の森泉先生と富田先生の記事をお読みください。お２人の先生の頑張りでなんとかやり遂げることができました。

実は私が関わる、帝塚山大学の学会大会が中止になったのはこれが初めてではありません。2020年に日本グループ・ダイナミックス学会の第67回大会を帝塚山大学で開催する予定で、私も事務局長として大会運営を行うことになっていました。しかし、COVID-19蔓延のために中止・延期となり、翌2021年もおさまっていなかったため、オンラインでの開催となってしまいました。自分と学会開催の相性の悪さを感じずにはいられませんでした。

もし学会を開催していれば盛り上がっただろうな、来ていただいた方にも喜んでいただけただろうなという無念もありますが、対面開催の準備とオンライン対応で学会を２回実施したような気分であり、正直やり切った感はあります。

大会参加そして発表を楽しみにされていた皆様にはこの場を借りてお詫び申し上げます。大会とは関係なく、ぜひ奈良、および帝塚山大学を今後、訪ねていただけると幸いです。

谷口　淳一（たにぐち・じゅんいち）／ 帝塚山大学心理学部教授。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（人間科学）。大阪国際大学人間科学部講師を経て現職。専門は社会心理学、特に親密な関係や自己呈示について研究。2021年～2023年度常任理事（広報担当）。

対面開催中止から代替イベント実施までの舞台裏

森泉 慎吾
（帝塚山大学）

2024年８月27日（火）、28日（水）において、帝塚山大学にて開催予定であった日本応用心理学会第90回大会は、台風10号接近のため残念ながら対面開催中止となってしまいました。大会準備委員会として、大会の１年以上前から幾度となく打合せを重ね、当日に向けて会場セッティングやアルバイトの手配、またスタッフのマニュアル作りまで全て終えていた段階での中止決定は、無念な思いでいっぱいでした。大会参加者の皆さまをはじめ、本大会に関わる全ての方の安全を最優先に考えた結果ですので、仕方ありません。中止が決定した当日は､大会委員長の谷口先生と「残念会」と称してヤケ酒？をしました。応用心理学会のHPを見ると、直前で開催が中止となった回は史上初なのではと思います。

ただ、中止を決定してからが大変で、関係各所への中止連絡とお詫びを真っ先に行いました。ちなみに、発注済みであった総会用・アルバイト用の大量のお弁当、懇親会は先方のご厚意によりキャンセルできたものの、既に購入して保管していた休憩室用の大量のお茶やお菓子は保管場所に残ってしまい、廃棄するのも今の時代に優しくないため、関係者の間で今も少しずつ消費をしています。

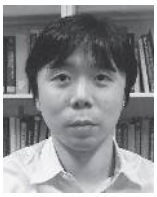
このまま全てがお蔵入りになってしまうのはあまりに勿体無いため、大会で企画していた特別講演、特別セミナー、シンポジウムの３つのイベントは、各先生方に無理を申し上げてスケジュールを再調整していただき、中止決定から１か月後の９月24日、および10月22日にそれぞれ実施することができました。９月24日には、特別セミナーにご登壇いただいた株式会社登酒店の登和哉様のご協力のもと、懇親会ならぬ利き酒体験会も開催され、本来よりはかなり小規模でしたが、奈良の美味しい地酒を堪能しながら、密な交流の場を設けることもできました。

これらのイベントと並行して、オンライン開催のためのホームページ改修も進め、各イベントの録画映像を公開するとともに、自主企画WS、および研究発表を予定されていた先生方には当日に向けてご準備いただいていた資料等を提供いただき、簡易ながらオンライン上での意見交換の場を設けることができました。非常に短時間でしたが、対応に快くご協力いただいた先生方に深く感謝申し上げます。

同年８月末で全て終わるはずだった第90回大会は、後期の授業期間にまで食い込み、結果的に、準備から全ての業務終了まで１年半以上を費やしました。本来の形での開催は叶いませんでしたが、逆に皆様の心に残る大会となったのであれば嬉しく思います。本来の大会開催期間は、奈良では台風の影響はほとんど見られず、驚くほど快晴であったことも今では良い思い出です。

森泉 慎吾（もりいずみ・しんご）／ 大阪大学大学院人間科学研究科助教などを経て、現在は帝塚山大学心理学部准教授。博士（人間科学）。2009年より日本応用心理学会員。2024年より理事。専門は産業・交通心理学。

台風接近の中で学んだこと



富田 瑛智
（帝塚山大学）

帝塚山大学学園前キャンパスで予定されていた日本応用心理学会第90回大会は、私にとって初めての本学会の大会運営委員の経験でした。学会によって運営方法が異なることを実感し、大変勉強

になりました。準備期間中、谷口大会委員長や森泉事務局長をはじめとする経験豊富な先生方の効率的な業務進行を目にし、「なるほど、こうすればよいのか」と多くの知見を得ることができました。

大会直前、台風接近の可能性が高まり、気がかりな日々となりました。対面開催可否の不確定な状況での対面開催準備作業は、想像以上に徒労に終わるのではないかという不安を感じる場面もあり、苦労しました。台風が奈良に直撃する可能性が高まると、運営メンバーで気象レーダーのサイトを頻繁に確認していたようです。その様子が当時のSlackに残っていました。参加者の皆様のホテルや航空券のキャンセル期限、弁当の手配変更の締切、１日のみの開催可能性など、協議した記憶もあります。

対面開催の中止については、これまでの準備への思いと、オンラインやハイブリッド形式への変更に伴う新たな対応への懸念もありました。しかし、参加者の安全を第一に考え、慎重に検討を重ねた結果、対面開催中止を決定いたしました。個人的には、私自身が大会期間前日に新型コロナウイルスに罹患してしまっていたので、この点では助かりました。

対面開催中止後は、迅速にオンライン形式への移行を進めました。大会ウェブサイトのオンライン開催ページを追加し、ポスター発表のオンライン公開、自主企画ワークショップの動画配信など、参加者が研究成果を共有できる環境整備に努めました。特別セミナーやシンポジウムは別日程で実施・録画し、オンラインで公開いたしました。オンライン公開により、大会参加登録者全員が視聴できるという機会を提供できたことはとても大きな利点であったと考えています。スタッフとしても対面開催のスケジュールでは聴講できなかった特別セミナーやシンポジウムを聴講できたことは個人的な収穫でした。本来の大会期間終了後もご対応にご協力いただいた先生方に深く感謝申し上げます。

本大会は運営側として多くの貴重な経験を得る機会となりました。参加者の皆様にとっても、「第90回大会はいろいろあったな」と記憶に残る大会になっていれば幸いです。最後に、ご参加いただいた会員の皆様、並びに運営にご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

富田 瑛智（とみた・あきとし）／ 筑波大学システム情報系助教、大阪大学大学院人間科学研究科助教、関西国際大学心理学部講師などを経て、現在は帝塚山大学心理学部准教授。博士（心理学）。専門は認知心理学・知覚心理学。

帝塚山大学学園前キャンパス

懇親会で配付予定だった
大会特製お猪口

第91回大会に向けて

桐 生 正 幸
（東洋大学社会学部）

日本応用心理学会第91回大会は、8月26日（火）・27日（水）に、東洋大学白山キャンパス（東京都文京区）にて、初めて開催させていただくことになりました。第91回大会のテーマは、「応用心理学の近未来を考える：基礎研究と社会実装の並走を目指して」です。

東洋大学は、1887（明治20）年に井上円了により「哲学館」として誕生し、1906（明治39）年に「私立東洋大学」と改称され、1928（昭和３）年には大学令により文学部を設置する大学となりました。そして、1949（昭和24）年に新たなスタートをきり、現在、14学部と大学院15研究科を擁する総合大学となっています。社会学部社会心理学科のある白山キャンパスは、都営三田線白山駅や東京メトロ南北線本駒込駅などから、徒歩５分程度の場所にあります。インバウンドなどの影響か、都内ホテルの料金は驚くほど高くなっておりますが、いずれの場所の宿泊を選ばれてもキャンパスへのアクセスは容易かと思います。

一般研究発表についてはポスター発表のみとし、これまで通り、学部生の教育発表や自主企画ワークショップも募集いたします。また両日、アカデミアと社会との交流を目指す大会企画シンポジウムを実施いたします。その一つが、AIと人文・社会系との融合を目指す「コンバージングテクノロジー研究大会」の共同開催ですが、学会員以外の多くの方々にもご参加いただけるよう一般公開としました。企業や異分野の方々と、ディスカッションができる場を設け、新たな応用心理学を模索できればと考えております。

初日の懇親会は本学の学食で行う予定です。なにぶん東京は、国内外の様々な美味しい料理がありますが、格別美味しい東京オリジナルが無いのも自慢の一つです。そのため、ぜひとも会員の皆様から、ご当地自慢のお酒など持参していただければと準備委員会一同、大いに期待しているところでもあります。

日々、大会当日は台風などが来ないよう祈祷し続け、不備の無い有意義な大会を開催したいと準備をしております。何か一つでも、新しい発見を見出せる、参加して良かったと実感できる大会にしたいと考えておりますので、みなさまの奮ってご参加、お待ちしております。

桐生　正幸（きりう・まさゆき）／ 東洋大学教授。専門は、犯罪心理学、社会心理学。先日、人工知能学会大会（大阪）にて話題提供をしたのですが、AI分野からの心理学に対する期待を、ヒシヒシ感じたところです。

交通社会の諸問題を質的・個性記述的に解決する意義と方法

大谷　亮
（一財）日本自動車研究所

まずは、日本応用心理学会第90回大会が台風10号の影響で中止となり、皆様と議論ができなかったことを大変残念に思うとともに、私たちの安全を第一にお考え頂きご英断下さった大会事務局ほか皆様に感謝申し上げます。

本ワークショップ（WS）では、第89回大会の「社会に役立つ応用心理学研究を考える―道路交通社会を例とした貢献と課題―」での議論を受け、交通社会の具体的な諸問題を例として、質的・個性記述的研究の意義や課題を抽出することを企図しました。この理由として、現状の交通心理学は、子どもや高齢者などの特定母集団の特性を量的に解明し、普遍的な事実を導き出す法則定立的なアプローチが主流となっているものの、交通参加者個々人の悩みや課題などに対して、質的に理解する個性記述的なアプローチは必ずしも多くはないことに、ある種の狭さを感じたためです。

話題提供として、小菅英恵先生（（公財）交通事故総合分析センター）からは、個人差が大きくなる高齢運転者の理解や個別対応となる問題の改善について、話題提供頂くことを計画していました。この中で、介入手法の効果検証や他事例への一般化を行う際の具体的な手がかりを得る際に、安全運転指導などの介入を行った高齢者の体験や意識に目を向ける質的・個性記述的研究は有用ではないかといったご示唆をお話し頂く予定でした。

中西誠先生（株式会社電脳）には、飲酒運転問題を題材として、運転免許取消処分または長期停止処分の場で行われている飲酒学級について、飲酒運転違反者へのカウンセリングスキルを用いた対話による再犯防止のための臨床的アプローチをご紹介頂くことを想定していました。飲酒運転を繰り返す背景には常習飲酒者の存在が考えられており、カウンセリングなどの臨床的アプローチの有用性や、長期停止処分を受けた飲酒運転者の類型化について、質的・個性記述的研究の意義について話題提供頂くことを考えていました。

中野友香子先生（科学警察研究所）には、幼児の親を対象とした交通安全教育に関する研究事例をもとに、交通ルールを遵守した歩行を子どもが習得するための継続的な家庭教育の実現のため、保護者向けの教育プログラムの試作と効果検証実験についてご紹介頂く予定でした。この研究の中で補足的に収集した質的データの結果から、教育プログラムの効果検証を行う際に質的データを活用することの有用性をご提示頂き、質的・個性記述的アプローチの意義をお話し頂く計画でした。

最後に、横井川美佳先生（京都市児童療育センター「なないろ」）から、活動や興味の範囲を広げて自らの世界を探究していく子どもの姿を踏まえ、発達に支援が必要な幼児期の子どもの「飛び出し」への対応について、子ども、保護者、および環境の視点から状況整理を行い、子どもと保護者の安全かつ快適な移動の実現に関する事例をご紹介頂くことを考えていました。この事例から、実践による理論検証や仮説生成のあり方についてお話し頂き、理論と実践の橋渡しのための質的・個性記述的研究の意義について話題提供頂く予定でした。

日本の交通事故発生件数は近年減少傾向にありますが、下げ止まりの状況です。このような状況の中、更なる交通事故低減を目指すには、きめ細かな対策が必要です。きめ細かな対策の実現のために、本WSで題材とした質的・個性記述的な研

究は有益であり、その重要性が益々大きくなると思います。

今後、交通という領域に留まらず、質的・個性記述的な研究について議論できれば幸いであり、その際、日本応用心理学会は最適な場と考えています。

末筆ですが、このような振り返りの機会をお与え頂き誠に有難うございました。

大谷 亮（おおたに・あきら）／ 中京大学より博士（心理学）を取得。（一財）日本自動車研究所主任研究員。専門は交通心理学、発達・教育心理学。特に、子どもや家庭の交通安全教育と保護者の監視に関する研究に従事。

小菅　英恵氏

中西　誠氏

中野　友香子氏

横井川　美佳氏

マインドフルネス体験の海外発信 ～VR×茶道の可能性～

岩﨑 和子
（京都工芸繊維大学）

現代のスピード社会では、多くの人々が日々の生活の中で大きなストレスを抱えています。そして、ストレスを軽減する方法の一つとしてマインドフルネス体験が知られており、中でも、茶道体験・日本文化が注目されています。私たちは、長く茶道をたしなみ、茶室で得られるマインドフルネス効果を体験してきました。そこで、急速に広がりつつあるVR（仮想現実）技術を用いて、茶道・茶室によるマインドフルネス体験を海外に発信し、ユニバーサル化させる可能性を研究しました。

茶は、８世紀に中国（唐）から日本に伝わり、禅宗の修行と深く関わり、「茶禅一味」ととらえられて、『茶道』へと発展してきました。『茶道』では、「和敬清寂」の精神をもって心を落ち着かせ、＜いま、ここ＞に集中することが求められます。『茶室』は、単に茶を点てて飲む部屋ではなく、心を癒やし、＜いま、ここ＞に集中できるように、露地の風情、にじり口を経た広がり、窓から差し込む明かりと影、天井の陰影、床の間の軸や生花、外から聞こえる鳥たちのさえずり、鹿威しの音、炉の炭と釜の音、湯の音に囲まれるという、五感すべてに働きかける創意工夫が凝らされた特別な象徴としての空間です。

一方、『マインドフルネス』とは、価値判断をすることなく、意図的に＜いま、ここ＞に注意を向け、受け入れる心の状態をいいます。この状態は、ストレスを軽減し、創造性・生産性を向上させるなど、人間関係を良好にする、エンゲージメントを向上させるなどのさまざまな効果をもたらす『茶道』との共通性が認識されるようになりました。オンライン茶会には、海外や日本で『茶室』体験がない人々も参加しています。

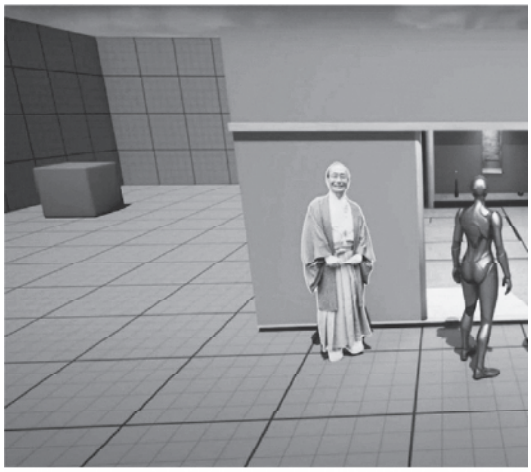
私たちは、この特別な『茶室』を体験したことがない人がVRで『茶室』を体験した際に、どのようなマインドフルネス効果が得られるかを検証したい、と考えました。その第一歩として、京都市役所内にある現実の茶室をフォトグラメトリ技術で3Dデジタルアーカイブ化し、『VR茶室』を作成しました。これにより、仮想空間での茶室をよりリアルに再現しました。この『VR茶室』を活用し、オンラインで海外に発信することによって、時間や場所の制約を受けずに、多くの人々が特別な空間でマインドフルネスを体験できます。この海外発信は、ストレス社会に対する日本文化からのひとつの「解」であり、海外で重視されている「共感」へのひとつのアプローチであり、ユニバーサルに体験していただくことが可能になります。

そこで、この『VR茶室』を実際にご覧いただき、忌憚のないご意見をいただき、今後の研究に役立てたいと考えました。この『VR茶室』には、さまざまな課題が残っています。技術面では、VR茶室体験の精度を上げること、リアル茶道体験との差異、ビジネスの場での応用可能性、日本文化に触れたことのない外国人が『VR茶室』を体験したことによるマインドフルネス効果の検証などです。私たちは、この『VR茶室』を、リアルとは別の体験として、独自の価値あるマインドフルネス体験の場として研究し、発展させていきたいと願っています。『茶道』の精神がグローバルに広がり、より多くの人々の心の健康と幸福に貢献することを期待しています。

上記は、企画者岩﨑和子（京都工芸繊維大学）、話題提供者相島淑美（神戸学院大学）・益田恵美子（茶話益田合同会社）、総合監修来田宣幸（京都工芸繊維大学）の４人のメンバーで自主企画ワークショップを行いました。

岩﨑　和子（いわさき・かずこ）／ アバターを用いた心理カウンセリングの研究で学術博士号を取得し、ITを活用した心理臨床に取り組み、さらにAI導入も研究中。企業のメンタルヘルス環境の改善では、弁護士と連携している。臨床心理士、京都工芸繊維大学研究員。

下記は、大会発表論文集の原稿に記載したスライド、一部の写真です。



動画

ロビンフッドたちの青春 ～青年期・成人期障害療育施設「もみじ・あざみ」での療育実践の発達的・臨床的意義～

田中 真介
（京都大学国際高等教育院）

●はじめに

糸賀一雄（1914～1968）は、1946年に滋賀県大津市に児童養護施設「近江学園」を設立し、戦災孤児や知的障害の子どもたちを受けとめてきました。その後、18歳で成人期に達する児童のために1953年に入所更生施設あざみ寮、1969年に入所授産施設もみじ寮を立ち上げます。もみじ寮とあざみ寮はのちに「もみじ」「あざみ」と命名され、2024年現在、もみじ41名（20～80歳代、平均年齢64歳８か月）、あざみ26名（同58歳６か月）の計67名が仕事と生活をともにしています。

職業教育（織物、陶芸、調理、クリーニング、農園、園外就労など）に取り組み、また演劇、音楽、絵画、スポーツ等の多彩な活動を取り入れた先駆的な生活療育を実践して、知的障害・発達障害を含む多様な基礎疾患や障害をもつ寮生たちの健康と発達を支えてきました。このワークショップでは、療育実践への参加と演劇公演での面談の記録をもとにした話題提供を受け、青年期・成人期・中高齢期の発達を支える生活支援と療育実践のあり方について考えあいました。

●話題提供

(1) 張 貞京（京都文教短期大学）「もみじ・あざみの療育実践の発達的意義～演劇公演での面談調査をもとに～」

もみじ・あざみでは、仲間とともに取り組む生活と仕事、そして演劇などの表現活動を通して、一人ひとりの発達を保障することを大切にしています。障害の種類や程度に違いがあっても仲間と支えあい、働くおとなとしての日常を大切にして、様々な表現活動が日常を豊かにしています。仕事の一つである織物づくりでは、織物工房でホームスパンを始めました。１台の織機を動かすために18人の力が必要で、織物を作る力に違いがあっても、一人も欠けることのできない大事な仕事だとみんなが認めあいます。その姿勢が生活全体に広がって、身近な仲間と共感しあい、時に憧れ、互いの人柄や発達を認め支えあってきました。

そんな中、クリスマス会の発表会で演劇活動が始まり、1969年以降にはあざみ寮、もみじ寮（男子寮と女子寮）の各寮が３月に「ひなまつり劇」を発表して本格的な演劇活動につながっていきました。1979年の創立記念の年に全員で一つの劇に取り組んだ「ロビンフッド寮生劇」は、以後プロの劇団員を始め多様な関係者の参加を得て公共のホールで公演を続けてきました。

演劇を通して非日常の劇の中で自分の思いを表現する喜びを感じ、自分や仲間の人柄や発達的な変化をより深く豊かにとらえていきます。こうした経験が自他の理解を深め、暮らしの中でも次の活動への見通しを持ち、将来の生き方をも充実させていく意欲につながっています。本大会では、ロビンフッド劇のときに実施した個別のインタビューをもとに、仲間とともに取り組んできた寮生活での、ひとりひとりの貴重な発達的変化を報告しました。

(2) 川岸育子（育つ人育てる人のための相談室）「主体的な暮らしの営みを支える療育実践」

生き物がもつ“子育て”という機能を“サービス”や“商品”として“外注”することが当たり前になり、“子育て”という機能がまとまりを失っ

てバラバラな断片になっています。そんな時代に、もみじ・あざみでは『ともに暮らしを営む』ことが大切にされてきました。寮生たちは「知的な幼さ」と「コミュニケーションのとりにくさ」というハンディキャップがあり、一人ひとり異なる家庭的背景をもっています。そのため職員は寮生の体験世界をイメージしにくく、その行動の意味の理解は容易ではありません。その中で寮生ひとりひとりを“わかろう”と努力し、寮生が“主体的に暮らしを営むこと”を目指す取り組みを実践してきました。

暮らしとは、食べる、寝る、働く、遊ぶことなどの多彩な組合せによって成り立ち、人が世の中に順応しつつ生きていく営みでもあります。怒り、悲しみ、喜び、願いを織りなす中で、きれいごとや理想だけでなく、時に互いに疲れて投げやりになることがありながらも、寮生たちは暮らしをともにしています。その日々は世の中への単なる順応にとどまらず、自発的・能動的・主体的に自分の生き方を新たに開拓していく貴重な時間となっています。秋の『文化祭』、また春の『ひな祭り劇』、そして５年に一度の『ロビンフッドの冒険』の舞台は、寮生活のそうした営みの貴重な「発表の場」となってきました。

文化祭での展示作品には日々の仕事と誇り、ロビンフッド劇からは、自分がこの世界に存在し自分の願いを素直に表現する喜びが伝わってきます。演劇という“晴れの場”は日々の営みと地続きでありながら“壮大なごっこ遊び”の舞台となり、“非現実的な現実”の世界の中に丁寧に配慮された枠が準備され、舞台は守られた特別な場となって“心の中にわだかまっている何かを安全に表現できる場”となります。これらすべてが『暮らしを営む』ことにつながり、「暮らし」は職員と寮生の血の通った生々しい育ち合いの営みとなっています。

●総合考察と討議のまとめ

1）玉村公二彦（京都女子大学）「もみじ・あざみの療育実践の意義と展望」

もみじ・あざみでは、寮生劇をはじめとして、これまで成人の人たちの憲法学習、講師を招いた各種の学び、絵画教室など多面的な療育実践を行ってきました。それらの実践は、専門家を交え、継続的に行うこと等を特徴としています。施設外の専門家と寮生が交流することによってもたらされるものの意義、そして将来のよりよい療育のあり方について考えました。

2）田中真介（京都大学）「演劇実践の発達的・臨床的意義～自己信頼性と社会的交流性の発達を支えた実践～」

寮生生活での多様な取り組みや演劇実践を通して、寮生の方々が自己信頼性（自分の価値を感受し尊重する力）と社会的交流性（自分とまわりの世界とのつながりを作る力）を啓培してきたことがよく伝わってきます。青年期から中高齢期の発達の過程にある私たち自身の生き方へも、新たな貴重な発達的・臨床的な示唆が得られたように思いました。

田中 真介（たなか・しんすけ）／ 発達論、神経科学、発達診断学、障害療育学を専攻。京都大学国際高等教育院。

若手会員研究奨励賞

権野 めぐみ

（名古屋葵大学）

このたびは、日本応用心理学会若手会員研究奨励賞にご選出いただき、誠にありがとうございます。

私は、クラシックバレエのダンサー・指導者として実践に携わるなかで、30代半ばに大学院に進学し、京都工芸繊維大学にて修士・博士の学位を取得しました。修士課程では、バレエ指導における言葉かけのわかりやすさについて、インタビュー調査や質問紙調査を中心に研究を行いました。博士課程では、バレエ経験から関心を持っていた柔軟性とスポーツ障害の関係に着目し、医療関係者とも連携しながら研究を進め、博士論文を完成させました。

しかし、常に心の中にあったのは、「指導における表現」という課題でした。修士時代に取り組んだ指導言語の研究は、私にとって原点であり、今後のライフワークになると強く感じています。このたび、「クラシックバレエ指導における言葉がけの効果と動作に関する研究―熟練者と成人学習者の比較―」という研究課題で若手研究奨励賞に応募し、受賞できたことは、自らの原点を改めて思い起こすとともに、大きな励みとなりました。

この研究を進める中で、より根本的な課題として、バレエやスポーツ指導における「身体接触」の問題にも着目するようになりました。従来、身体を触る指導法は効果的とされてきましたが、その科学的な検証や倫理的評価は十分ではありません。そこで現在は、スポーツ現場における身体接触指導法の実態と心理的影響を明らかにするための質問紙調査研究にも取り組んでいます。言葉かけの研究と身体接触の研究は、一見異なるテーマのように見えますが、「学習者にとって安全かつ効果的な指導とは何か」という共通の問いを探究するものです。今後も、現場の実情に寄り添いながら、実践と理論の橋渡しとなる研究を続けていきたいと考えております。

現在は、児童教育学科に専任教員として着任し、幼児教育・児童教育の身体表現や運動・スポーツに関する授業を担当しています。研究活動と並行して教育現場に立つなかで、子どもにとってわかりやすく伝わる教示のあり方に強い関心を持つようになり、これらの実践的な気づきは、今後の研究の新たな軸として発展させていきたいと考えています。実践に根ざした問題意識を大切にしながら、学術的な裏付けに基づく研究を積み重ね、現場と学術の架け橋となる成果を目指してまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

権野　めぐみ（ごんの・めぐみ）／ 2023年３月、京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科博士後期課程修了。博士（学術）。現在、名古屋葵大学児童教育学部助教および京都工芸繊維大学研究員。スポーツ科学分野をベースにクラシックバレエ、スポーツの指導法（声かけや身体接触）について研究を行っている。

若手会員研究奨励賞

巻田 晴香
（同志社大学大学院）

この度は「適切な自己批判の促進による失敗後の動機づけの改善：新しいアプローチでの介入法の開発と効果検証」というテーマで若手研究者奨励賞を賜りありがとうございました。ご多用の中審査いただきました先生方、ならびに学会関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。本研究は、これまで動機づけに負の影響を持つことが報告されてきた自己批判を、建設的で動機づけを高める効果を持つ方法へと変容させる教育的介入法の開発を目的としております。

自己批判とは、自分の性格や行動について否定的に評価することを指します。

自己批判は動機づけに負の影響を持つことが広く知られ、自己批判を提言させるアプローチが推奨されていました。一方で近年の研究では、自己批判を建設的な質ものを使用することで、自己批判が動機づけを促進する可能性が指摘されています。博士課程の研究では、自己批判は努力への自己批判、能力への自己批判の２つに分類することが可能であり、前者は動機づけに正の影響、をもつ一方で、後者は動機づけを阻害することが明らかになりました。

この研究を踏まえ、本研究では、従来の自己批判を抑えるというアプローチではなく、自己批判の質を改善するという新たな視点から、能力への批判を抑制し努力への批判を促進するという独自の方法をとることを特徴としています。このような建設的な自己批判を促進することで、失敗後の動機づけの向上を目指しています。

本研究により自己批判に対する新しい介入法が開発されることの利点の一つは、自己批判に対する介入の選択肢が増加することだと考えられます。教育的介入は個人差があるため、多様な方法を提供することが重要だと考えられます。本研究の新しい介入法は、これまで効果が出にくかった層にもアプローチが可能であると思います。特に、日本において自己批判は頻繁に行われる傾向があり、社会的規範としての役割も持つため、完全に抑制することは難しいと言えます。だからこそ、単に低減させるだけではなく自己批判の質を識別し建設的に用いる方法について教育することは、新たな心理適応の促進法の一つになるかもしれないと考えています。

今後は教育現場や組織等での普及を目指し、人々のメンタルヘルスや動機づけの向上へ貢献できるよう研究を進めていきます。本賞を励みに、研究成果を実社会で広く役立てられるよう、より一層努力してまいります。引き続きご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

巻田 晴香（まきた・はるか）／ 2020年同志社大学心理学部卒業、2022年同志社大学大学院心理学研究科博士前期課程修了、現在同研究科博士後期課程在籍。修士（心理学）。専門は社会心理学で、自己批判の動機づけへの効果や自己批判への肯定的認識の文化差について研究している。

職場探訪

▶筑波大学附属視覚特別支援学校◀

見えないからこそ、自分の価値を観て、感じて、実感したい

塚田 直也

はじめまして。私は、東京都文京区にある筑波大学附属視覚特別支援学校で子どもたちと日々、遊び、遊び、遊び…時々、勉強もしている塚田直也と申します。今回は、私の職場である筑波大学附属視覚特別支援学校について紹介させていただきます。

本校の特徴は、何といっても150年近い歴史のある盲学校という点です。皆さんは、盲学校とはどういう学校かご存じでしょうか？ちなみに「盲」という字は、最近は人権的な側面などの理由により用いられることが少なくなり、本校も2007年より「視覚特別支援学校」という名称になりました。盲学校（視覚特別支援学校）とは、視覚に障害のある子どもたち（幼児児童生徒）や、何らかの理由や原因により視力が低下したり、眼疾患等により視力を失ったりした方々が通ってくる場、学校です。

盲学校（視覚特別支援学校）は全国に設置されています。国立、公立、私立の学校を合わせると約70校あります。近年は、インクルーシブ教育（障害のある子どもたちが合理的な配慮のもと地域の学校に通うシステム）の進展や、医学の進歩、出生数の減少など、様々な要因により、どの学校も在籍者数が減っています。特に、一般の小中学校、高等学校の教育内容に準じた学びを求めている視覚に障害のある子どもたちは、盲学校（視覚特別支援学校）ではなく、地域の学校を選択するケースが多くなってきているようです。一方で、視覚障害だけではなく、知的障害や聴覚障害など、他の障害を併せ有する子どもたち（以下、重複障害の子どもたちと表記します）が盲学校（視覚特別支援学校）に通ってくるようになり、年々、重複障害の子どもたちの在籍数が増えています。

さて、ここで本校の歴史を振り返ってみましょう。本校の出発点は、1875年にさかのぼります。古川正雄、津田仙、岸田吟香、中村正直、ボルシャルト・フォールズが訓盲所（視覚に障害のある方が学んだり、職業技能を身につけたりする場）設立について相談し、楽善会という組織を立ち上げました。その後、楽善会訓盲院が創立され、それ以来、脈々と盲教育の実践が続けられ、今日に至ります。そうした経過の中では、人と人とが傷つけあい、生存権や発達権、人権がないがしろにされた出来事、戦争があったことを決して忘れてはならないと思っています。

長い、長い歴史のある本校ですが、重複障害の子どもたちが学ぶ専門の学級（重複学級）は設置されていませんでした。もともと視覚に障害のある子ども（大人を含めて）を対象としており、知的障害や聴覚障害など、その他の障害を併せ有する子どもたちへの教育には、十分に取り組むことができていませんでした。

もちろん当時の実践者の中には、障害の重い子どもたちこそ丁寧に受けとめたいという熱きねがいをもった人たちがいました。そうした人たちの思いや、重複障害の我が子を育てる保護者の方々の切実なねがい、1979年の「養護学校義務制実施」以来広がってきた「権利としての障害児教育」という考え方を受け、1989年度より、試行的に小学部重複学級が始まりました。その後、1992年度から正式に「特別学級」という名称で許可され、1995年度からは、２学級が許可されて現在へとつながっています。

私は、その「特別学級」の担任として、子ども

たちとかかわる日々を過ごしています。伝統的に盲教育では、手指の感覚をはじめとして、自分のもてる感覚機能を最大限に発揮して、情報を獲得し、学び、知識や技能を高めることが重視されてきました。視覚障害のある人たちが使用する「点字」はまさに指先の感覚を研ぎ澄まし、指先で感じて、観て、理解していく言葉です。そのため、日々の教育実践では、物に触れたり、物を操作したり、実体験を伴う活動にたくさん取り組んだりするなど、心と体を動かして、学ぶことを大切にしています。

こうした心と体を動かし、外界の人や物と交流することは、手指をはじめとする感覚機能を育てるだけではなく、自分自身の存在を実感し、自分のよさや大切さを知り、味わうことにもつながっていきます。自分のよさや大切さを実感することで、子どもたちは自分自身の価値を認識する力、「自己信頼性」を育んでいきます。自分の姿を見ることができない子どもたちですが、自分の価値を実感することで、確かに「自分」を観て、感じて、自分という存在へのゆるぎない確信を育んでいきます。

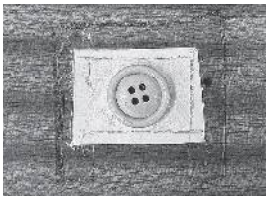
盲教育、視覚障害児教育とは、見えない、見えにくい世界を生きる子どもたちの「観たい」、「感じたい」、「知りたい」というねがいを受けとめ、自己信頼性という自分の価値を実感、認識する力を育むことを援助する営みなのです。これは、「見える」世界を生きる子どもたちの保育、教育、子育てにも共通する普遍的な価値ある実践ではないか…と感じています。私はそんな盲学校（視覚特別支援学校）が日本各地で大切にされ、これからも存続してほしいと思っています。インクルーシブ教育が進む中だからこそ、障害・発達・生活を見つめ、一人一人を大事にした特別な教育の場が必要だと考えています。

塚田 直也（つかだ・なおや）／ 2007年から教職に就き、2010年より筑波大学附属久里浜特別支援学校にて自閉症児の教育に携わる。2021年より視覚特別支援学校で盲重複障害の子どもと過ごす。子どもたちが坊主頭をたたき、素敵な音を奏でる瞬間が最高の幸せ。

〈階段の手すり～今、何階にいるのかな？～〉

本校の階段の手すりには、凸型の突起物があります。子どもたちが指先で突起物を触り、自分が何階にいるのかが分かるようにするためです。

〈私の大切な「名前」〉



自分の名前を表す「印（マーク）」です。点字をまだ読むことが難しい子は、こうした印（マーク）が大切な自分を表す証になっています。

〈私の大切な「居場所」〉

教室表示は基本的に墨字（文字）と点字です。教室によっては、写真のように「鈴」や突起物など、子どもたちに分かる方法で大切な居場所を表すようにしています。

2024年度齊藤勇記念出版賞を受賞しました。

職場で使えるジェンダー・ハラスメント対策ブック —アンコンシャス・バイアスに斬り込む 戦略的研修プログラム—

小林 敦子 著

2023年6月8日発行
現代書館
本体2,000円（税別）

職場のハラスメント防止のための、より実効的な方法はないだろうか？そういった素朴な疑問を起点とし、ハラスメントの一つであるジェンダー・ハラスメントを題材に、心理学の知見の社会実装の観点から、本書をまとめました。

初めに職場のジェンダー・ハラスメントの定義やその影響を、後半部分にはそれを防止するための試行錯誤を、さらにジェンダーという枠を超えて、あらゆる属性へのハラスメント防止を視野に開発した、研修プログラムを紹介しています。

職場のジェンダー・ハラスメントは「ジェンダーに基づく役割を他者に期待する行為」（小林、2015）です。女性を重要な役割から除外し、周縁的役割に押し留め、男性には男らしさを求めて、仕事を無茶ぶりするような行為です。こういった行為は性的な関心がなくても起こるため、本書ではセクシュアル・ハラスメントとは別概念として扱っています。

ハラスメントには被害者への悪影響が確認されており、その防止のために組織においては研修や啓発が行われています。そしてその内容は、不適切な行為をしないようにと促すものです。しかし、不適切であると理解し、禁止されれば、人はそれをしないようになるのでしょうか？また、ジェンダー・ハラスメントに関しては、日本には「ジェンダー」という語に抵抗を持つ人が多いため、これをテーマにした研修は忌避される傾向にあります。しかし、こういった抵抗感は、固定的な性役割規範へのこだわりの強さを示すものなので、そういう人にこそ、ジェンダー平等の啓発や研修は必要なはずです。

これらの課題を解決する手立てとして、ハラスメントを「しないように促す」ことをしないでハラスメント解消に導く、ハラスメント防止研修を開発しました（Kobayashi & Tanaka, 2024）。本書ではその内容と、研修効果を検討した結果も掲載しています。巻末には、実際に使用したワークシートや紙筆版IAT、おまけとして、研修に使った創作落語の台本も収録しています。さらに、昨今、日本社会で広がっているアンコンシャス・バイアスの誤用問題にも触れ、それがジェンダー平等推進にどのような不都合を生じさせるかを論じています。ご関心のある方にお読み頂けますと幸甚です。

末筆となりますが、これまで研究継続にあたり様々な先生方のご教示を頂いたことに、心よりお礼申し上げます。この度の受賞を励みとし、これからも研究活動を展開していきたいと考えています。誠にありがとうございました。

小林 敦子（こばやし・あつこ）／ 日本大学大学院総合社会情報研究科修了、博士（総合社会文化）。社会に根深く残る性役割の固定をジェンダー・ハラスメントと定義し、実証的研究を積み上げてきました。現在では、ジェンダーの問題に留まらず、あらゆる偏見や差別解消に向けた研修プログラムの開発・講演活動を行っています。

『ひかり輝くものを求めて』

ハル・モリシタ 著

2023年11月15日発行
ナカニシヤ出版
1,980円（税込）

長年、働く人たちのストレス問題に取り組んできた著者が、**「ひかり輝くものを求めて」**で異色のデビュー。臨床心理士・心理学者が、在職者のライフ・スタイル問題とカウンセリングの体験を踏まえ、私たち現代人の来し方と行く末をみつめた、生き方を問う冒険ロマン小説。

研究に行き詰った地球環境学者の陽次郎は、妻や娘を連れ３人で文明社会を逃れてアフリカの奥地に。家族が旅で、アフリカに行きおどろくべきものに出会う。ヨウムとの出会いに始まり、ボノボ、なぞの３人組が次々にあらわれる！

プロローグでは３名の家族の長い船旅の話から、いきなり海賊の話とクジラの話が出てきて先ずは驚きです。アフリカという異国の地で親子３人がどのようなことを始めるのだろうかと興味がそそられます。実際手に取ると研究者として、臨床体験を通したノンフィクション、フィクションを織り交ぜた小説。研究者なら自身に置き換えて身近なものとして読むことが出来ます。

ひとが人間として、生きるヒントを読み取ることが出来るお勧めの一冊です。

ハル・モリシタ　本名　森下　高治（もりした・たかはる）／　1973年関西学院大学大学院文学研究科教育心理学専攻修了。相愛大学 流通科学大学を経て帝塚山大学・同大学院教授 同大学院心理科学研究科科長（2012～2015年）帝塚山大学名誉教授。パナソニック（株）カウンセリングルーム（旧松下電工）嘱託（2000～2019年ルーム長）、日本応用心理学会理事長（2009～2012年）、1981年文学博士（職業行動の心理学的研究）公財）日本臨床心理士資格認定協会 臨床心理士（4295号）1996年。主な著書:『仕事とライフ･スタイルの心理学』共著2001　福村出版　『産業心理臨床入門』共編著2006　ナカニシヤ出版　『産業心理臨床学の勧め ー 現代から未来につなぐ』2020　ナカニシヤ出版。

1

新たなスタートにあたって
新理事長からのメッセージ

日本応用心理学会　第8期理事長 **田中 真介**

●はじめに

日本応用心理学会（応心）は、2024年４月より新しい理事会・常任理事会をスタートしました。2027年３月までの３年間、新しい理事長として田中真介、副理事長として来田宣幸が担当し、常任理事10名、理事・推薦理事36名で本学会の活動を支えていきます。

●新たな委員会構成の提案と趣旨

(1) 新体制での委員会構成

応心の委員会のあり方について議論し、2024年５月の常任理事会で次のような新たな委員会体制の案を提案しました。

1）「ホームページ委員会」と「クロスロード委員会」の独立…「広報委員会」を二つの専門分野に分割することによって、それぞれの委員会に委員長・副委員長・委員を置いて活動を充実させます。

2）「学術推進委員会」…「学会賞選考委員会」（学会賞）、「優秀大会発表賞選考委員会」（大会賞）、「齊藤勇記念出版賞選考委員会」（齊藤賞）、及び「応用心理士認定審査委員会」（応心士）の４部門の資格・受賞選考を扱う委員会をひとつに統合するとともに、全体を『学術推進委員会』として新たに立ち上げ、応心の「学術推進」のための取組みを総合的に検討して実践します。

3）「社会連携委員会」…「日本心理学諸学会連合（日心連）」と「心理学検定」の２つの部門は、「学会横断型の連携・交流」の役割を担う独自の意義をもった専門部門としてとらえ、「社会連携委員会」として位置づけます。

(2) 新たな委員会の構成

新年度2025年４月に、軽部幸浩常任理事より、事務局長、機関誌編集委員会、齊藤勇賞、学会史編纂委員会など応心のすべての役職を辞任したいとの届け出がありました。それを受けて事務局及び各委員会の委員長と委員を再構成して新たなスタートを切りました。（＊印は新委員長、カッコは副委員長）

・理事長…田中真介、副理事長…来田宣幸、事務局長…来田宣幸

・委員会：

①機関誌編集委員会…松田浩平（佐藤恵美）＊松田先生の療養期間中は田中が委員長を代行

②企画委員会…桐生正幸（松本友一郎）

③学会活性・研究支援委員会…上瀬由美子（来田宣幸）

④国際交流委員会…松本友一郎（小林剛史）

⑤学術推進委員会…伊坂裕子（中井宏）

・学会賞…伊坂裕子、大会賞…中井宏、齊藤賞…伊坂裕子＊、応心士…小林剛史

⑥ホームページ委員会…来田宣幸（兼任）

⑦クロスロード委員会…来田宣幸（兼任）

⑧学会史編纂委員会…田中真介

⑨倫理委員会…来田宣幸（兼任）

⑩社会連携委員会…田中真介

・日心連（社員）…田中真介・上瀬由美子、心理学検定局（常任運営委員）…小林剛史

⑪学会事務局…来田宣幸（事務局長）、吉廣麻美（IBI）

●本学会の歴史と課題

第２次世界大戦前の1927年に関西で「関西応用心理学会」第１回大会、関東では1931年に第１回「応用心理学会」大会が開催されました。1934年以降、隔年で合同大会を開催し、1936年の第２回合同大会で大会名を「日本応用心理学会」として現在に至っています。

日本応用心理学会の設立後、本学会を起点として、個別の各分野の心理学会が設立され発展していきました。一方で、実社会の多様な問題にアプローチするためには、特定分野だけでなく、関連領域との協働・連携が重要となるでしょう。本学会の会員の専門領域は多岐にわたっていますが、関連の深い分野をひとつにまとめて部門構成を行い、各部門の研究の充実・発展を促してきました。

〔応心の部門構成〕

（第１部門）原理・認知・感情
（第２部門）教育・発達・人格
（第３部門）臨床・福祉・相談
（第４部門）健康・看護・医療
（第５部門）犯罪・社会・文化
（第６部門）産業・交通・災害
（第７部門）スポーツ・生理

本学会の研究活動は、心理学の全領域を含むとともに、広く人文・社会科学、自然科学の各学術分野との連携を模索し、現実社会の問題をとらえた新たな共同の取り組みを構想し実践してきました。応心は専門諸学会の中でも独自の役割をもった学術機関として、心理学に限らず関連する多様な研究領域の「専門知」が交流する「学問的な広場」を作り出し、新たな「学術的な越境」を可能にする「総合知」、「学際知」、さらに新時代の「教養知」を育む重要な場となっています。

常任理事会では、応心のこの新たな３年間で、私たち自身が研究者としての「自己信頼性」を大切に育みながら、温かなつながりを構想して互いに互いを支え導きあっていく「社会的交流性」の力を生成発展させ、自分自身の専門的・総合的な力を高め充実させていけることを大切にしたいと話し合ってきました。そのために、とくに以下の３つの観点について、会員のみなさんの研究活動と社会実践活動を支援していきます。

・①（研究基盤への支援）会員の研究・社会実践活動への支援策の拡充（特に若手研究者支援の充実）
・②（研究交流への支援）論文投稿・研究発表への支援。公開シンポ・研修会での研究交流の活性化
・③（社会活動への支援）委員会主催セミナーの構想と実践、国際学会への参加支援、専門資格の充実

本学会の活動を楽しく、よりよいものにしていくために、お気づきのことや新たなアイデアなど、いろいろな機会に遠慮なく率直にご提案ください。この８月には、ツクツクボウシの軽やかな鳴き声が響き渡る東洋大学での大会で、みなさんとゆっくりお会いできるのを楽しみにしています。（たなか しんすけ）

2

第90回大会委員会

谷口 淳一（帝塚山大学）

2022年に開催された第88回大会（京都工芸繊維大学）における総会にて、第90回大会を帝塚山大学にて開催することが決定され、大会委員会が立ち上げられました。大会委員長は谷口が務め、事務局長は森泉

慎吾先生にご担当いただきました。さらに、森下高治先生および蓮花一己先生には顧問として大会運営をご支援いただきました。2023年には富田瑛智先生が帝塚山大学に着任され、同時に副事務局長にご就任いただきました。

第88回大会、第89回大会（亜細亜大学、2023年）の総会にて、それぞれご挨拶の機会をいただき、奈良での開催に向けて、多くの会員の皆様にご参加をお願いしてまいりました。

2024年に入り、準備は順調に進みました。また、森下先生、蓮花先生が関係各所にお声かけいただき、多額の協賛金を集めることができました。懇親会では奈良の地酒をご紹介する企画を実施するため、天理の登酒店様にご協力いただくこととなりました。特別セミナーの実施など、懇親会の準備も万全の体制が整っておりました。

しかしながら、皆様ご存じの通り、台風10号の接近により、残念ながら対面での開催は中止となりました。大会委員会ではその後の対応を協議し、2024年９月24日および10月22日に代替イベントを実施いたしました。当日の様子は録画し、大会参加登録者の皆様に視聴いただける環境を整えました。また、自主企画ワークショップや研修会についても、発表者の先生方にご協力いただき、録画動画を大会特別サイトにて配信いたしました。さらに、ポスター発表についても多くの発表者の先生方にご対応いただき、特別サイト上にポスターを掲載し、参加者との意見交換の機会を設けることができました。

これらの代替イベントの実施、オンライン対応によって、大会委員会の活動は2024年度末にまで及びましたが、なんとか役割を果たすことができました。（たにぐち　じゅんいち）

3 事務局だより

軽部 幸浩（東京富士大学）

日本応用心理学会事務局では、会員の皆様からの問合せや新入会員の受付など、さまざまな事務処理を一手に引き受けています。

わが国の応用心理学的活動は1920年ころからすでに芽生えていましたが、その当時は実験・基礎の研究が中心でした。そのような中で、日本応用心理学会は、心理学の研究が社会の具体的な問題解決に資することを目指し、広い専門領域の研究者が集まり1936年に設立されました。このように伝統のある学会において2024年４月より第８期理事体制の下、事務局長を拝命しました。微力ながら、会員の皆様へのサービス向上と応用心理学の普及に少しでも役立つことができれば幸甚です。「メールニュースの配信」も事務局で行っています。会員の皆様や外部の方々から頂戴した内容を理事長、副理事長と取捨選択して会員の皆様方のところへお届けしています。「公募情報」「研究会の案内」など営利目的を除く内容につきましては、比較的スムーズにメールニュースにてお知らせしています。

そこで、会員の皆様におかれましては、お気づきのことがございましたら、どうかご遠慮なく学会Webサイトに用意してある「お問い合わせ」に忌憚のないご意見やご要望をお送りください。できるだけ皆様方のご意見やご要望を反映し、さらに素晴らしい学会にしたいと考えています。

なお、学会事務の業務委託を締結した株式会社国際ビジネス研究センター（IBI）には、日ごろから多大なる尽力を賜っており、深甚なる感謝を申し上げます。（かるべ　ゆきひろ）

4 機関誌編集委員会

軽部 幸浩（東京富士大学）

2024年４月から日本応用心理学会第８期理事体制が発足しました。應用心理学研究第１巻が1978（昭和53）年に発行されてから、今回は第50巻となり無事に１号～３号までを発行することができました。第１号は、第１部門（原理・認知・感情）、第２部門（教育・発達・人格）、第３部門（臨床・福祉・相談）、第４部門（健康・看護・医療）の論文、第２号は、第１部門（原理・認知・感情）、第２部門（教育・発達・人格）、第４部門（健康・看護・医療）、第５部門（犯罪・社会・文化）の論文、第３号は、第１部門（原理・認知・感情）、第２部門（教育・発達・人格）、第３部門（臨床・福祉・相談）、第４部門（健康・看護・医療）、第５部門（犯罪・社会・文化）、第７部門（スポーツ・生理）の論文が掲載されています。第１号と第２号は発刊が若干遅れましたが、第３号は予定通りに発行ができました。今期の機関誌編集委員会委員も、投稿論文の速達化を図るために、前期と同数の人員を配して会員の皆様方からの論文の投稿をお待ちしています。

末尾になりますが、委員長（機関誌編集委員長）の交代と昨年末からの委員長の体調不良により会員の皆様には多々ご迷惑をおかけしたことと思います。この場をお借りして機関誌編集委員会委員長に代わり深謝申し上げます。（かるべ ゆきひろ）

5 企画委員会

桐生 正幸（東洋大学）

2024年度の企画委員は、桐生正幸（東洋大学、委員長）、松本友一郎（京都女子大学、副委員長）、上市秀雄（筑波大学）、島田恭子（東洋大学・（社）ココロバランス研究所）、小嶋理江（名古屋大学）の５名のメンバーにて運営を行いました。

実施した企画は、「学会大会研修会」と「公開シンポジウム」の２つになります。

①応用心理士研修会について

2024年度第90回大会（帝塚山大学、2024年８月27日～28日）にて、２題の研修会をオンデマンド配信にて実施しました。

テーマは、「保育・子育て」と「AI技術との融合」について、それぞれの研究と実践についてお話いただきました。両テーマとも実りある研修会となったところです。

a　講師：田中真介先生　京都大学国際高等教育院
　　題目：乳幼児期の発達の魅力をとらえた保育・子育て～子どもたちの「言葉にならない言葉」を受けとめる～

b　講師：紺野剛史先生　富士通株式会社コンバージングテクノロジー研究所　プロジェクトディレクター
　　題目：「AI技術と心理学による融合：心理学の社会実装を目指して」

②公開シンポジウムについて

2025年３月２日（日）13：00-17：00、東洋大学白山キャンパスにて一般社団法人ココロバランス研究所の協賛を受け、「ウェル・エイジング（より良く老いる）を考える」をテーマに開催いたしました。各シンポジストが15分ずつ話題提供を行い、ウェル・エイジングに関する最新の動向や革新的な取り組みをご紹介していただきました。会場に約100名が、またリモートにて約150名が参加し、学術的視点や実践的アプローチを交え、多角的な議論を展開したところです。

司会・パネリスト・指定討論は以下の方々です（敬称略・順不同）。

司　会	島田恭子	一般社団法人ココロバランス研究所・東洋大学
パネリスト	梶原健司	株式会社チカク　代表取締役社長
	高野利実	がん研有明病院　乳腺内科部長
	大平智祉緒	株式会社RingsCare　代表・看護師
	小林洋子	NTTデータ経営研究所　シニアマネージャー
	尾阪咲弥花	聖路国際病院　緩和ケア科　医師
	古市盛久	株式会社御用聞き　代表取締役社長
指定討論	桐生正幸	東洋大学社会学部社会心理学科　教授

企画委員のメンバーが５名の新体制となり、2024年度もなんとか無事に乗り切れたところです。2025年度は、学会大会が東洋大学開催となり、応用心理士研修会もより充実したものにしていきたいと考えております。また、公開シンポジウムは名古屋大学にて小島先生が魅力的なテーマにて企画中です。どうぞ、ご期待ください。（きりう　まさゆき）

6

学会活性・研究支援委員会

上瀬 由美子（立正大学）

本委員会は日本応用心理学会の活性化と若手会員の研究支援を活動目的とし、今期は委員長（上瀬由美子）と副委員長（来田宣幸）の二人三脚で進めています。今年度は例年の「若手会員研究奨励賞」の審査に加え、初学者向けの投稿支援企画を実施しました。

１．2024年度若手会員研究奨励賞審査活動

今年度は期日までに３件の応募があり、委員長を含めた４名で審査を行いました。その結果３名の受賞候補者が選出され、常任理事会の承認を経て奨励賞受賞が決定しました（受賞者のお名前や研究内容については、学会ホームページに掲載されています）。

２．学会活性活動

今年度は学会活性活動として、投稿の作法を確認し積極的な投稿に繋げる場を会員の皆様に提供することを目的とした初学者向け投稿セミナーを企画・実施しました。

【初学者のための投稿支援セミナー：『応用心理学研究』に挑戦しよう】
日時：
　2025年３月22日（土）13：00〜15：00
開催形式・場所：
　対面参加：立正大学品川キャンパス６号館611教室
　オンライン参加：Zoomを用いたオンラインミーティング
登壇者（敬称略）：
　田中 真介（京都大学　日本応用心理学会理事長）
　軽部 幸浩（日本大学　応用心理学研究副編集委員長）
　佐藤 恵美（東京富士大学　応用心理学研究副編集委員長）
　山口 茉優（早稲田大学　日本応用心理学会2024年度学会賞受賞）
司会・進行：
　上瀬 由美子（立正大学　学会活性・研究支援委員会委員長）
　来田 宣幸（京都工芸繊維大学　学会活性・研究支援委員会副委員長）

　2025年１月に会員向けメーリングリストおよびホームページ上で参加者募集のアナウンスを行い、76名の会員から申し込みがありました。当日は登壇の先生方より、論文執筆の心得、研究倫理、修正論文の作成の仕方や査読者とのやりとりの作法、応用心理学研究オンライン投稿の方法、初学者へのアドバイス（学術論文作成と論文審査の体験談）についてお話をいただきました。講義終了後は登壇者が自身の体験も交えて参加者からの質問に回答・アドバイスし、短い時間を惜しみつつセミナーが終了しました。参加者からは「投稿を考えているので勉強になった」との声が寄せられています。また参加者には後日、セミナーのスライドを配布し録画もオンデマンドで配信しました。

　ご登壇下さった先生方、おかげさまで大変充実した企画にすることができ、深く感謝申し上げます。本委員会では、会員の方々の研究活動につながる企画を今後も検討していきたいと考えております。

（かみせ ゆみこ）

7 国際交流委員会

松本 友一郎（京都女子大学）

　2024年度からは、松本友一郎（京都女子大学）、小林剛史（文京学院大学）、蓮花一己（帝塚山大学）、谷口淳一（帝塚山大学）、森泉慎吾（帝塚山大学）の５名で担当しています。

　2024年度は、主に以下の３つの活動を行いました。

1．2026年７月にイタリアのフィレンツェ（Florence）で開催される31st International Congress of Applied Psychology（以下、ICAP2026）への若手研究者発表支援と英文特集号の準備
2．入会申込書及び入会理由書の英語版の完成
3．日本心理学諸学会連合による国際学会についてのアンケートへの対応

　2025年度は、いよいよICAP2026に向けた活動が動き出します。国際交流委員会としては2025年４月初旬に若手研究者発表支援の募集要項等の準備をすべて終えており、この原稿を執筆している４月29日現在、

常任理事会の審議を待っている状態です。恐らく、このクロスロード17号が会員の皆様のお手元に届く頃には、募集の詳細をご報告できるのではないかと思います。世界中から応用心理学者が集まるICAPは４年に１度の開催です。前回はCOVID-19により中止となりましたので、今回は８年ぶりの開催となります。国際的な活動を視野に入れている若手会員のご応募をお待ちしております。

ところで、若手研究者発表支援は国際交流委員会単独ではなく、学会活性・研究支援委員会にもご協力をいただいています。また、英文特集号については、機関誌編集委員会のご協力をお願いしています（英文特集号の詳細は次号で）。このICAPという機会を学会全体で盛り上げていけたらと思っています。

（まつもと　ともいちろう）

8

学会賞選考委員会

伊坂 裕子（日本大学）

学会賞選考委員会は、2024（令和６）年度より、伊坂裕子（日本大学）、中井　宏（大阪大学）、柿本敏克（群馬大学）、木村友昭（MOA健康科学センター）、久保尚也（駒澤大学）、森泉慎吾（帝塚山大学）の６名の新体制でスタートしました。

2023年度に学会賞規程が改正されましたので、2024（令和６）年度は新規程に基づいて、「優秀論文賞（Best Paper Award）」と「奨励論文賞（Encouragement Award）」が選考されました。学会賞は、前年度に応用心理学研究に掲載された論文について、理事・監事の先生からのご推薦をいただき、それに基づいて学会賞選考委員会での一次審査を実施しております。委員会における審査については、前委員会から引き続き、公正さを最優先とし、満場一致で決めることを原則としております。

2024年度は、38名の理事・監事のうち、37名の先生方からご推薦をいただくことができました。公正な選考のためにも、できるだけ多くの理事・監事の先生からのご推薦をいただけることが重要だと思っています。ご推薦をいただく時期が、新年度が始まる時期と重なり、ちょうどご多忙な時期となってしまいます。それにもかかわらず、昨年度は多くの先生方からのご推薦をいただけましたことに感謝申し上げます。改正された規程では、自薦も可となっております。学会賞は、毎年、選考いたしますので、引き続き多くの理事・監事の先生方のご協力をいただけますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2024年は、日本列島を彷徨した台風のせいで、第90回大会の対面の開催が中止されてしまいました。学会賞は大会当日の総会で授与されることになっておりますので、2024年は残念ながら対面での授与式はかないませんでした。2025年の学会賞も選考が進んでおります。第91回大会では、応用心理学研究第50号から選考された学会賞の授与式を対面で実施できることを期待しております。（いさか　ひろこ）

9

齊藤勇記念出版賞選考委員会

軽部 幸浩（東京富士大学）

齊藤勇記念出版賞へのご推薦をお願いいたします。本学会名誉会員の齊藤勇先生の趣旨および基金により平成27（2015）年４月より施行されている出版賞です。本学会の会員により、応用心理学や心理学のテーマを心理学を専門としない一般の方々にわかりやすく書かれた書籍とその著者を表彰することを目的としています。出版賞の大賞書籍は、本学会会員による推薦（他薦・自薦）により、選考委員会で検討され、常任理事会にて決定されます。出版された当該年度（４月１日～翌年３月31日）の書籍について、原則単著、当該年度内に１冊としています。出版された次年度の年次総会において、賞が授与されます。基金より副賞（金３万円）が贈られます。

2020年度として、2021年３月に一般会員から推薦が提出されました。選考委員会および常任理事会にて検討され、受賞が決まりました。ご紹介いたします。

著書名：職場で使えるジェンダー・ハラスメント対策ブック　―アンコンシャス・バイアスに斬り込む戦略的研修プログラム―

著者名：小林 敦子　発行所：現代書館　発行年月日：2023年６月

「お茶くみ・コピー」「受付係」「秘書」等の補佐的な仕事をさせられ、リーダーとしての経験を積ませてもらえないという、組織におけるジェンダー・ハラスメントの実態を分析し、対策方法を説いている。

本書ではハラスメントの具体例や、研修後のアンケート、落語研修の台本など、研修の意図と内容を丁寧に紹介している。読みながら自身の偏見に気づき、対策を講じてほしいと指摘している。

以上、会員の皆様も、ぜひご一読ください。（かるべ ゆきひろ）

10

応用心理士認定審査委員会

小林 剛史（文京学院大学）

日本応用心理学会が認定する「応用心理士」制度は、1995年に正式に発足した本学会独自の資格制度です。その原点には、1955年に本学会が提案した「心理技術者養成教育課程に関する提案」があり、後の臨床心理士や認定心理士の制度とも深い関係を持っています。こうした長い歴史の流れを経て創設された「応用心理士」は、応用心理学の専門的知識と実践経験を有する方々の社会的信用と役割を後押しするための資格です。

2024年度には、前期・後期それぞれ２名ずつ、計４名の申請があり、いずれの方も審査を経て認定されました。申請者の皆様が多様な現場で心理学の知見を活かして活動されていることは、制度の意義を改めて感じさせるものです。

「応用心理士」は資格であり、免許（ライセンス）ではありません。よって、特定業務の独占を保証するものではありませんが、本資格の取得により、職場における心理学的活動の正当性や専門性がより明確になり、他職種との協働や対外的な信頼形成において重要な後ろ盾となります。教育・福祉・医療・司法・産業・交通・行政など、さまざまな領域で活躍される方々が、応用心理学の知見を活かし、責任ある実践を行うことが、今後ますます期待されています。なお、申請に際しては、認定基準のいずれに該当するの

かが明確になるよう、申請書の記載をお願いしております。本学会のホームページにもあるように、基準は（1）大学等での心理学教育の修了、（2）学会での研究発表や論文発表、（3）応用心理学に関連する職務経験、（4）研修会の参加実績など、さまざまな実績に対応できる柔軟な設計となっております。また、要件のいずれにも完全には該当しない場合でも、総合的な審査により認定の可否を判断いたします。応用心理学は、現代社会の多様な課題に対して実践的に貢献できる学問領域です。ぜひこの資格制度を、多様なキャリアの中で心理学を活かしたいと願う多くの方々にご活用いただきたく、積極的な申請をお待ちしております。今後とも応用心理士制度へのご理解とご支援を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

（こばやし　たけふみ）

11 ホームページ委員会

軽部 幸浩（東京富士大学）

2024年４月より第８期理事体制の下、今までは広報委員会の中で学会広報活動の一環として行ってきた学会ホームページの運営が､新しく委員会として発足しました｡行っている内容は従前のように､｢学会ホームページの更新」が主な作業となります。学会ホームページにつきましては、逐次的に最新の情報を会員の皆様にお届けできるように新しいコンテンツの追加や更新作業等をしています。

2024年度中は委員会委員がおりませんでしたが、今年度から２名の先生に委員をお願いできました（学会ホームページの「役員・事務体制」https://j-aap.jp/?page_id=62を参照）。また、新しいコンテンツの企画案等ございましたときにお気軽に問合せページに用意されているフォームよりお知らせください。これからもホームページ委員会をよろしくお願いします。（かるべ　ゆきひろ）

12 クロスロード委員会

来田 宣幸（京都工芸繊維大学）

『クロスロード』をご愛読いただき、誠にありがとうございます。まず、2024年度号の発行が本来予定していた年度末を大幅に超え、2025年の暑さを感じる頃までずれ込んでしまったことを、深くお詫び申し上げます。私が編集実務に十分関与できなかった一方で、本原委員が献身的に作業を進めてくださったおかげで、何とか刊行にこぎ着けることができました。この場をお借りして、本原さんの多大なご尽力に心より感謝申し上げるとともに、読者の皆さまにおかれましてもご寛容いただければ幸いです。

この遅延を真摯に反省し、次号では発行時期を厳守すると同時に、内容面でもより一層充実した特集をお届けしたいと考えています。とりわけ次号では、大学案内･大学院案内に焦点を当て、さまざまな大学･学部・研究室の特色を紹介する特集を企画しています。近年は個人情報保護の観点から会員名簿の印刷公開が難しく、理事や常任理事であっても会員全体の所属を即座に把握することが困難になりました。そのため「どのような方が日本応用心理学会の会員なのか」は、学会大会に参加して初めて分かることもしば

しばです。しかし実際には、基礎から応用まで多様な分野の研究者が本学会に集い、学生や大学院生とともに幅広い研究を展開しています。

次号では、国内外の大学・大学院が提供する応用心理学関連プログラムはもちろん、やや領域が外れる場合でも会員の先生方が活躍されている研究室や大学をできる限り取り上げ、それぞれのカリキュラム概要、研究設備、特色あるプロジェクト、就学制度、奨学金情報などを網羅的に紹介する予定です。進学やキャリアを検討する読者にとって保存版となるような情報を提供し、進路選択や研修先決定の一助となることを目指します。

誌面をより魅力的なものにするためには、各大学・大学院・研究室の最新情報が不可欠です。関係各位におかれましては、研究施設や講義風景、キャンパスの写真とともに紹介原稿をお寄せいただければ幸いです。いただいた情報をもとに、読者の皆さまが「日本のどこで、誰と、どのように学べるのか」を具体的に思い描ける誌面づくりに尽力いたします。

『クロスロード』は、会員同士をつなぎ、応用心理学の最前線を共有する媒体です。進学ガイド特集に限らず、取り上げてほしいテーマやご意見、ご質問がございましたら、いつでも委員会までお寄せください。今後とも『クロスロード』へのご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

（きだ のりゆき）

13 倫理委員会

来田 宣幸（京都工芸繊維大学）

倫理委員会は、会員が心理学の専門家として遵守すべき倫理的規範を整備し、問題発生時には迅速に対応することを目的に活動しています。

2024年度の一年間、重大な倫理事案の正式な申告はございませんでした。一方で、倫理委員会での検討対象となり得る問い合わせや相談もありましたが、いずれも早期解決が図られ、委員会として正式な審議に至る事態は発生しませんでした。会員の皆様が高い倫理意識を保ち、適切に行動された結果と受け止めております。

活動案件が少なかったとはいえ、委員会は多岐にわたる新しい課題を注視し続けております。近年は生成AIの活用やオンライン調査の拡大に伴い、研究倫理の新たな論点が急速に浮上しています。「生成AI利用時の透明性と信頼性の確保」、「オンライン実験における参加者保護の強化」、「二次データ利活用ガイドラインの整備」、「学会発表の質疑応答などにおけるハラスメント防止」などなど、関連学協会や海外事例を参考にしながら検討を進めることが必要ではないかと感じています。そのほか、身近な困りごとなどありましたら、ご意見をいただければ幸いです。

今後も倫理委員会は、会員の皆様が安心して研究・実践に取り組める環境づくりを支援し、社会からの信頼を高める一助となるよう努めてまいります。引き続きご理解とご協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。（きだ のりゆき）

14

学会史編纂委員会

委員長 **田中 真介**（京都大学国際高等教育院）

学会史編纂委員会は、2016年に新たに設置されました。関西応心（1927年）、東京応心（1931年）、東西の合同の応心大会（1934年）の発足を起点とすると、本学会は、2027年、2031年、または2034年に学会設立100周年を迎えます。本委員会は、これまで本学会が蓄積してきた学術的・社会的な研究実践の貴重な成果、また本学会の歴史的な発展過程に関する史料を収集・整理し保存する仕事を行ってきました。そのことを通して、本学会が担ってきた基礎研究と社会実践の成果と課題を明確にし、新たな視点から本学会の今後の発展のための課題と展望を明らかにしていくことを目指しています。他の委員会とはカラーが異なりますが、各委員会の活動をよりよく展開し、会員の研究活動を適切に支え励ましていくための基盤となるような役割を果たしていきたいと期しています。

今年度は田中真介、古屋健、藤田主一、また実務補佐として時田学（事務局幹事）の４名の委員でスタートしました。おもな活動内容として、１）本学会に関わる資料や史料を収集・整理・保存し、アーカイブとしてホームページで公開する。２）名誉会員へのインタビューを行い、応心の基礎研究と実践活動の歴史的な発展経過をまとめる。そして、３）収集した資料と面談の記録をもとに、「日本応用心理学会100年史」を編纂していく準備を行っていきます。

次の２年間で、①名誉会員へのインタビュー録音記録のテープ起こしと整理、②学会活動に関する歴史的な資料（機関誌・広報誌、事務局・大会・常任理事会・理事会・総会の記録など）の保管と整備を行います。また、③新たな学会史（100年史）の編纂の趣旨と方法論を検討して、発刊までの具体的なタイムスケジュールを立案していく予定です。

〔参考資料〕

応心ホームページに新たに発見された歴史資料を継続的にアップしています。ぜひご参照ください。

１）「応心アーカイブ」https://j-aap.jp/?page_id=10825

・「心理学講座・全16巻」、「心理学講座たより」

２）そのほかの関連資料、歴史的な経緯の情報の保管先

・「応用心理学ニュースレター」https://j-aap.jp/?page_id=191

・「応用心理学のクロスロード」https://j-aap.jp/?page_id=17

（たなか しんすけ）

15

心理学検定

小林 剛史（文京学院大学）

2021年度・第14回よりComputer Based Testing（CBT）方式へ移行した心理学検定は、2024年度も引き続き年２回の実施体制で運営されました。受検の利便性向上に加え、安定した実施が可能となったことから、年々受検者にも定着してきた印象があります。

団体受検制度につきましても、2023年度より学校法人等のご担当者の利便性を考慮し、従来の申し込み方式からバウチャー制度へと変更いたしました。あわせて、団体申し込みの下限人数を10名に緩和したこ

とで、徐々にではありますが、団体受検の割合も増加傾向にあります。CBT化の恩恵を今後さらに活かしていけるよう、運営体制の柔軟性と受検者の多様なニーズへの対応を進めております。たとえば、障がいのある方への対応として、点字による受検も一部可能となっており、少しずつではありますが、より多様な受検者の方々にご参加いただけるような体制整備が進んでおります。一方で、まだまだ至らぬ点も多く、受検者の皆様にはご不便をおかけする場面もあるかと存じます。今後もより良い検定の実現をめざし、関係者一同、丁寧な運営に努めてまいります。引き続き、心理学検定へのご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

なお、2025年度より心理学検定局は新しい任期期間に入り、新体制でのスタートを切っております。常任運営委員のメンバーもほぼ刷新され、フレッシュな顔ぶれとなりました。新たなメンバーにつきましては、心理学検定局のホームページにてご確認いただけます。

また、長年にわたり心理学検定の発展にご尽力くださった藤田主一先生が、このたび心理学検定局の顧問にご就任されました。これまでの多大なるご貢献に、心より感謝申し上げます。（こばやし　たけふみ）

「原稿募集」

『応用心理学のクロスロード』誌は、「さまざまな分野の人々の出会いと発見の広場」を目指しています。皆様からの原稿を広く募集しています。

●募集コーナー（カッコ内は文字数の目安です）：

①「巻頭言」（1200～3000字）

②「大会の感想」（400～800字）*東洋大学での大会の感想などを自由に。

③「ホープ登場」：大学院生、若手研究者（1000～1200字）*自薦・他薦を問いません。

④「大学探訪」「職場探訪」（1000～2000字）

⑤「CROSSROAD ESSAY」（2000～3000字）

⑥「海外最新事情」（800～1000字）

⑦「おすすめのDVD紹介（映画紹介）」（800～1200字）

⑧「BOOK REVIEW（本との出会い・おすすめの一冊・本を出しました・書評）」（400字）

⑨「応用心理士の現場」（800～1200字）。

⑩その他、本誌への感想やメッセージなど自由にお寄せください。

※次号（18号）では、会員の先生方が活躍されている研究室や大学・大学院の紹介コーナーを予定しています。多くの会員の皆さまからのご協力をお待ちしております。*詳細はホームページに掲載します。

●原稿締め切り：2025年9月30日（火）

●応募方法：原稿には、連絡先（住所、電話、メールアドレス、所属）を記載して、メールにファイルを添付してお送りください。送り先は、学会ホームページでご案内いたします。

2024年度日本応用心理学会学会賞

［敬称略、所属は論文掲載当時、順不同］

日本応用心理学会では、毎年、学会賞と優秀大会発表賞を授与しています。これらの賞がどのように選ばれるかを説明させていただきます。

まず、学会賞ですが、前年度の機関誌「応用心理学研究」に掲載された論文から選考されます。学会賞には、論文賞と奨励賞があります。論文賞は、原著論文と総説論文の中から選ばれます。一方、奨励賞は、それ以外の論文、つまり資料、短報、実践報告などから選ばれます。選考の手順ですが、学会の理事・監事が対象論文の中から推薦し、それに基づいて学会賞選考委員会が選考を行い、さらに常任理事会で審議・決定します。多くの人が関わっているので、厳正公平な選考となります。

つぎに、優秀大会発表賞ですが、大会に参加された会員の皆さんにはなじみ深いものと思われます。

優秀論文賞

「養育者による子どもの顔認知ポジティブバイアス」

山口 茉優（早稲田大学大学院人間科学研究科）
杉森 絵里子（早稲田大学人間科学学術院）

［掲載雑誌］
『応用心理学研究』 第49巻 第1号，41-49，2023

奨励論文賞

「組織の健康と心理的安全性がストレス反応と職務満足感に与える影響の検討」

小川 邦治（西南学院大学人間科学部）
田原 直美（西南学院大学人間科学部）

［掲載雑誌］
『応用心理学研究』 第49巻 第3号，223-232，2024

学会だより

日本応用心理学会の入会申込書を次にご案内しますので、入会を希望する方はお申し込みください。
このページをコピーし必要事項を記入して、学会事務局宛までご郵送ください。

日本応用心理学会入会申込書（一般・院生・学生）注2，注3

		申込年月日	20　年　月　日
フリガナ		推薦者（会員）注6	
氏　名			㊞
ローマ字		性　別	男・女
		生年月日	年　月　日
現住所	〒＿＿＿＿		
	電話番号	（　　）	
最終学歴	〔　年　月〕【在学中のものではなく，卒業あるいは中退・修了について学科名まで】		
所　属 注4	名　称		
	所在地	〒＿＿＿＿　電話番号＿＿＿＿（　　）	
	職名 現学歴	【職名の場合には年数，院生の場合には課程・専攻，学部の場合には学校名・学年】	
研究領域 注5	テーマ		
	原理　学習　認知　感情　教育　発達　人格　臨床　福祉　相談　健康　看護 医療　犯罪　社会　文化　産業　交通　災害　スポーツ　生理　行動分析　調査 統計　その他（　　）		
メールアドレス			
備　考			

※申込用紙の個人情報は、学会活動や運営上必要な事務連絡、本学会の事業目的達成のため以外に利用されることはありません。

記入上の注意

注1．楷書で正確に記入してください。
注2．申込書の上部に書かれている会員種別で，**希望する会員の種類を○印で囲んで**ください。
注3．一般会員，院生会員の入会資格は，会則第4条第2項に次のように定められています。
一般会員，院生会員の入会資格は，次の通りとする。
(1)四年制以上の大学で心理学およびその隣接分野を専攻した者
(2)一般社団法人日本心理学諸学会連合が認定する心理学検定1級合格者で22歳以上の者
(3)第1号に準じ常任理事会が認める者
(1)の隣接分野とは以下の分野を指しています。
教育学，児童学，人間関係学，体育学，社会学，社会福祉学，芸術学，宗教学，医学（心身医学，精神医学，行動医学など），看護学，経営学，認知科学（人口頭脳など），人間工学，など。
(1)の入会資格に該当しないと判断される場合は，備考欄に高等学校卒業後の学歴および職歴（年数）をできるだけ詳しく書いてください。(2)の入会資格にて入会を申し込まれる場合は心理学検定1級合格証のコピーを添付してください。(3)の第1号に準じるものと認めることができるかを判断する資料とします。記入欄が不足したときは別紙に書いて添付してください。後日さらに詳細な資料を求める場合もありますのでご了承ください。
注4．社会人学生の場合には，在学大学（大学院）名等詳細を備考欄に記入してください。
注5．研究領域は，**主な3領域を○印にて囲んで**ください（3つを超えて○印を付けてもかまいません）。
注6．推薦者を必ず書き署名・捺印をもらってください。推薦者がいない場合には，理由書を添付してください。

事務局受付〔　　〕　審査〔　　〕　本人連絡〔　　〕　会費納入〔　　〕

日本応用心理学会認定
「応用心理士」資格認定申請の御案内

「応用心理士」事務局

本誌の「応用心理士の現場」では，応用心理士資格を活かして活躍する会員の皆様をご紹介しています。多趣多様な分野で心理学の知見を発揮される会員が１人でも多くなりますよう，ぜひ資格の取得をお勧めします。

【認定制度の趣旨】

日本応用心理学会では，学会員で業績のあるものに対し，本人の希望により一定の手続を経て，標記の「応用心理士」の資格認定証を交付することにいたしました。

現在，いくつかの心理学関係の学会で資格を認定しています。厳重な試験に合格しなければ一定の資格を認定しないところもありますし，心理学に関する所定の単位を取得すれば一定の資格を認定するところもあり，まさにさまざまです。本学会では認定の基準を一歩進めて，学会の会員（名誉会員・一般会員・院生会員）であること，きちんとした業績を持っていることを主要な要件にしました。資格要件の詳細についてはこの手引きのなかに明記されています。この資格は，個人や集団の心理学的指導に努力している人びとの社会的地位を承認するための一助として考えられたものです。

【資格要件】

学会で認定する「応用心理士」は，学会員の専門職としての資質があると認められた証明になります。

資格の要件は，日本応用心理学会認定　「応用心理士」認定制度による認定資格の基礎的条件として，本学会に入会後満 2 年を経過し，現在会員であることが必要です。

さらに，次の（1）から（4）のいずれか 1 つに該当し，応用心理学の専門職としての資質があると認められた人に認定されます。なお，（1）から（4）のいずれかの要件も完全に満たすことができない場合は，該当内容を総合し，判断されます。

（1）　学校教育法に定められた大学または大学院において，心理学専攻又はこれに準ずる分野を卒業あるいは修了した者（学位授与機構の審査により学士の学位を授与された者も含む）。

（2）　本学会機関誌『応用心理学研究』に 1 件以上の研究論文（共著も含む）を発表した人，または本学会の年次大会において 2 件以上の研究発表（単独発表または責任発表のもの）をした者。

（3）　認定審査委員会が応用心理学と関係があると認めた専門職で，3 年以上の経験を有する者。

（4）　応用心理学と関係ある職で 3 年以上の経験を有し，本学会研修委員会企画の「研修会」に 5 回以上参加した者（申請時に 5 回分の「受講証明書」を添付してください）。

【資格申請の手続き】

会員で日本応用心理学会認定　「応用心理士」の資格を得ようとする人は，以下の順序に従って申請の手続をしてください。

［1］「応用心理士」の資格申請書類をダウンロードしてください（学会ホームページに掲載）。

［2］申請書類に所要事項を記入し，下記の申請受付期間内に，送付してください。

［3］審査料（10,000 円）は，郵便振替で送金してください。
郵便振替の振込先
口座番号　　00110－6－359059
加入者名　　日本応用心理学会
※注意：申請書類一式の中に同封されている郵便為替用紙をご利用ください。

［4］提出する申請書は次の通りです（提出の際確認してください）。
（1）様式 1（資格認定申請書）
※所定の枠内に証明証用カラー写真（ヨコ 35mm，タテ 45mm）を貼付してください。
※審査料の振込金受領証をコピーし貼付してください。
（2）様式 2-1（履歴書）
（3）様式 2-2（業績書）
（4）「研修会」参加を資格要件とする場合は，「受講証明書」5 回分を添付してください。

［5］認定審査委員会では，提出された書類について審査し，結果を文書にて，申請者に通知します。合格した人は認定料（30,000 円）を納入してください。入金されますと，日本応用心理学会認定　「応用心理士」として認定し認定証を交付します。また，日本応用心理学会認定　「応用心理士」名簿に登録するとともに，本学会機関誌『応用心理学研究』に掲載して公表します。

応用心理士認定書（カード）の見本

【申請受付期間】

	【前　期】	【後　期】
申請受付期間	毎年 4 月 1 日～6 月末日	10 月 1 日～12 月末日
審査結果通知	8 月上旬	翌年 2 月上旬
認定料納入日	8 月下旬まで	翌年 2 月下旬まで
認定証の送付	9 月下旬	翌年 3 月下旬

【応用心理士事務局】

日本応用心理学会認定　「応用心理士」事務局
〒162-0041
東京都新宿区早稲田鶴巻町 518　司ビル 3F
株式会社　国際ビジネス研究センター内

クロスロード委員会

来田 宣幸（委員長）
大門 耕平
権野 めぐみ
塚田 直也
本原 琴美
田中 真介

表紙写真：「稲の花、咲く」
2025年５月15日、西表島にて
（撮影：本原琴美）

応用心理学のクロスロード Vol.17

編集・発行　日本応用心理学会
〒162-0041
東京都新宿区早稲田鶴巻町518
司ビル３F
(株) 国際ビジネス研究センター内
TEL.03-5273-0473
FAX.03-3203-5964
E-mail j-aap@ibi-japan.co.jp
HP https://j-aap.jp/

デザイン　株式会社 杏林舎
印刷・製本　株式会社 杏林舎

2025年７月31日 発行

編集後記

■ 2024年度号の刊行が大幅に遅れ、2025年の暑さを感じる時期となってしまったことをお詫び申し上げます。編集実務に十分関われなかった中、本原委員の多大なご尽力に心より感謝いたします。次号のことをいうと鬼が笑うのかも知れませんが、次号では、大学・大学院案内に焦点を当て、日本応用心理学会の会員が活躍する研究室・大学を幅広く紹介する企画を実施したいと考えています。個人情報保護の影響で会員の所属把握が難しくなっている中、学会の多様性と研究の広がりを可視化し、研究設備、特色あるプロジェクトなどを網羅的に掲載して、進学やキャリアを検討する学生・研究者にとって保存版となる特集を目指したいです。（来田 宣幸）

■ この度、「クロスロード」という会員間の交流を促進し、また、学会の発展に寄与されている発行紙の編集委員の任を拝命し、身が引き締まる思いです。この積み重ねの基盤の上に、微力ながら貢献できることを光栄に思っております。」と、決意を持っておりましたが、「微力ながら」はまったく謙遜ではなく、ほとんど貢献することができない１年目でありました。次年度は「微力」として貢献できるようにしたいと思います。（大門 耕平）

■ 本年度より編集委員を務めさせていただくことになりました。応用心理学会との出会いは、2022年に開催された第88回大会です。それ以来、学会への参加や若手会員研究奨励賞への応募など、さまざまな形で関わらせていただいております。「クロスロード」は、これまで読み手として楽しみにしてきた媒体でした。今回、編集委員としてその運営に携わり、皆さまの報告をいち早く拝見できるのは、少し“役得”のようにも感じております。今後は、読んでくださる皆さまにとって、より親しみやすく、学会とのつながりを感じられる誌面づくりに、少しでも貢献できればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。（権野 めぐみ）

■ 皆様、初めまして。塚田直也と申します。私は、日々、障害児教育の実践現場で、子どもたちやそのご家族の方々と関わる仕事をしています。現在は、盲学校（視覚特別支援学校）に勤務しています（詳細は、本号の職場探訪をご覧ください！）。私は根っからの実践家であり、「学会」という名がつく集まりには、苦手意識があります。そんな私ですが、多彩な仲間が集う応用心理「学会」は、居心地がよく、自分の価値を発見し、大切にする場になっています。「クロスロード」という名前のとおり、多彩な価値が重なり合い、新たな価値の発見と創造につながるように、皆さんと一緒に本誌を育て、つくりあげていきたいと思います。（塚田 直也）

■ 「７月発行！」を合言葉にスタートした年度初めでしたが、何とかお届けすることができました。タイトなスケジュールの中、杏林舎には大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。「応用心理学のクロスロード」。この冊子が、応心の多彩な分野と、年齢層の豊かさと、何より会員の皆様の持ち味が交差する場とできるよう努めて参りたいと思います。（本原 琴美）

■ クロスロード誌は2009年の九州大学での大会時に構想が提案され、2010年６月に創刊し今年15歳になりました。今期はこの６名の委員で取材・原稿依頼、編集・デザインを担当します。本誌が「互いに気軽に対話できて、相互理解を深める広場」となって、多くの方々が交流してくださることを期待しています。大会の時にはぜひ本誌を持参して、各専門領域の重鎮の先生方や、多彩な分野で新鮮なアイデアを生み出して新たな研究にチャレンジしている若手の方たちに気軽に話しかけてみてください。夏８月に東京白山の東洋大学でお会いできるのを楽しみにしています。（田中 真介）

●近年の社会動向や研究成果を踏まえ、タイトルも新たに前書をリニューアル。

恋愛と結婚の心理学
恋愛心理学研究の現在地

髙坂康雅 著

■A5判／並製／244頁 ◎定価2750円

●好評の前書を最新の研究成果を取り入れ全面改訂。学生、現職教員にも最適。

基本から学ぶ 発達と教育の心理学

藤田主一 編著

■A5判／並製／204頁 ◎定価2860円

●読みやすい2色刷り、豊富な図表、充実のコラムと読書案内は教科書にも好適。

生涯発達の心理学
理論と実践への誘い

大川一郎、安藤智子（ともこ） 編著

■A5判／並製／300頁 ◎定価3080円

●好評前著を大幅改訂。AI、ネット依存など現代的課題も取り上げる。

新・脳から始めるこころの理解
心理学・脳科学による心の見方

安部博史 編著

■A5判／並製／266頁 ◎定価3080円

●生理学から心理統計まで解説。各章のコラムと設問が学習を助ける最新入門書。

心理学入門
生物・個人・社会を融合するこころの科学

広重佳治 著

■A5判／並製／216頁 ◎定価2200円

●時代に合わせ刷新した待望の新版。今日的なマーケティングに役立つ知識を提供。

新・消費者理解のための心理学（第2版）

永野光朗、秋山 学 編著

■A5判／並製／304頁 ◎定価2970円

●実施から分析・解釈、詳細な実践例を収載。前版を大幅に刷新した必携書。

新版 ロールシャッハ法解説
名大法マニュアル

名古屋ロールシャッハ研究会 編

■B5判／並製／178頁 ◎定価3190円

●多様化した現代の臨床現場で、いかにして「見立て」を支援に結び付けるか。

心理臨床における「見立て」
こころの支援にむけて見立ての本質的意味を探究する

髙橋靖恵 監修　西 見奈子 編

■A5判／上製／164頁 ◎定価2970円

●現状の課題を整理し、子育て支援の将来像を見通した論考や実践・提言を収載。

臨床心理士による心のケアと子育て支援

臨床心理士子育て支援合同委員会 企画
亀口憲治、深津千賀子、瀧口俊子、馬場禮子 責任編集

■A5判／上製／432頁 ◎定価3960円

●社会全体が子育ての理解を深めることがウェルビーイングに繋がることを論説。

多様性の時代と変化する子育て事情
ソーシャルワークから考える子育て支援のアップデート

一瀬早百合 著

■四六判／並製／284頁 ◎定価2420円

福村出版 | 〒104-0045 東京都中央区築地4-12-2
TEL 03-6278-8508 FAX 03-6278-8323 https://www.fukumura.co.jp

◎定価は税込み価格です。